
これでいいんですか??

crime025

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これでいいんですか？

【Nコード】

N7445M

【作者名】

crime025

【あらすじ】

気付いたらド○クエの世界にいた俺は、その世界の母に付けられた『アラン』という偽名を使い（原因不明なまま）とりあえずブラブラとのん気に冒険に出た。

そして流されるまま旅をしていると、いきなり呪われた天空の剣が・・・っ！？大丈夫か、この物語！？

プロローグ ーある女性の視点ー（前書き）

はじまりだけ見るとなんとも言えないんですが、まあ見てってください♪

あと、小説タイトルがかなり変ですが、

Don't touch, please.（触れないで下さい）

内容は主にド○クエ4・5ッ！詳しくは後書きでッ♪

貴方にわれらが神のご加護がありますように……。

プロローグ ーある女性の視点ー

「母さん、俺・・・」

彼は少しバツが悪そうな顔をして言った。

「言わなくていい。分かってるから・・・」

そう、私には分かってる。彼が何を言いたいのか、その顔を見れば分かる。

「貴方は昔から一度言い出したら聞かない子だったか」

私は続ける。

「私は貴方を止めはしない」

私には彼を止める事が出来ない。それほど彼の決意は固かったから。

「だけど約束して・・・」

私は一息入れて続ける。

「必ず帰ってくるって——」

彼は力強く頷いて私の元から去って行った

それは私が彼と結んだ最後の約束——

プロローグ ーある女性の視点ー（後書き）

とりあえず、内容を4・5にしたにはそれらがなんとなく似ていたのと（6・7もってないからそれは知りませんが）、その内容が結構好きだったからです（私的に5が一番好きです）。

9も入れようかと迷ったのですが、ちょっと無理がありました（出す機会があれば出そうと思っていますが）。

とりあえず私（弟）が持っているのは4・5・8・9だけ（8はプレステです）なので、それとなく出ているかもしれない。

あと、雑談ですが、弟が夏休み中に6を買ったそうです。では、ここで決め台詞を・・・。

神さまはいつも私達を見守っていてくださいます。

また おいでなさいね。

プロローグ 少年の視点

ある山奥に 名もない小さな村がありました。

その村に住む人々は 決して表に出ず よそ者を寄せ付けず ひっそりと暮らす毎日。

村人達以外は そんな村が あることさえ 知りませんでした。

「母さん、俺・・・」

俺はバツが悪そうな顔をして言った。だって、こんなこと言ったら母さんを悲しませてしまうんじゃないかと思ったから。

「言わなくていい。わかってるから・・・」

母さんは俺が何がいいたいのか分かったようだ。母さんは少し悲しそうに顔でどこか遠くを見ながら言った。

「貴方は昔から一度言い出した聞かない子だったから」

「私は貴方を止めはしない」

「だけど約束して・・・」

母さんが一息入れて続ける。

「必ず帰ってくるって——」

俺は力強く頷いて、この家を去って行った。

それは俺が母さんと結んだ最後の約束——

プロローグ 〈少年の視点〉（後書き）

はい、次からいよいよ一話です。というか始めの方はパクらせてもらいました。でも、一つだけ忘れないで下さい。ド○クエ4の村は滅びましたが、この村はこのまま誰にも知られないまま存在し続けるでしょう。

大切な話をするときは時と場所を考えましょう。（前書き）

とりあえず、少年『アラン』の冒険がスタートです。
かなりグダグダしてますが楽しんで頂けると光栄です。

大切な話をするときは時と場所を考えましょう。

とりあえずこれからどうしよう？

基本的に無計画な俺はフラフラと街中を歩き回っていた。

なんでまだ街にいるのかって？

そんなの決まってる・・・

だっていきなり外に出るのって危険じゃん？

ド○クエの主人公だっぺいきなり町の外には出ないし・・・

ってことで、とりあえずド○クエの基本『情報収集』でもします
かッ
♪

数分後、

よし、とりあえず分かったことは・・・

近くの村で起きているある事件のこと

——これがなかったら話が進みません。

魔物について

——知らなかったら困りますね。

戦い方

——基本ですね。

薬草等の使い方

——怪我したときに便利ですね。

この街の名前

——知らないほうがおかしいです。

話し方

——そんなの教えてもらわなくても結構です。

人の家に勝手に入っても怒られないこと

——不法侵入じゃないんですか。

勝手にその辺の壺とか樽とか壊しても怒られないこと

——何かの暴走族ですか？

宝箱とかタンスとか押入れとか開けても何も言われないこと

——このままでは泥棒が大量発生してしまいます。

メニューの出し方

——Xボタンって何ですか？どこにあるんですか？

・・・後半が何かおかしいような気がする。

まあ、すること決まったからいいかあゝ、とか思っていると不意に声をかけられた。

「ハア・・・ハア・・・待って、・・・アラン」

誰かが息を切らしながら走ってきた。

とりあえず俺の名前を知ってるということは危険人物ではなさそうだ

「もう、ハア・・・ハア・・・探したん・・・ハア・・・だから・・・」

ああ、誰かと思えば母さんじゃないですか。

って、あれ！？ 母さん！？

もしかして俺がこの辺うろろしてるから何か勘違いしてるんじゃない・・・

勘違いされても困るし、とりあえず誤解を解いておこうッ！

「違うよッ！ ベッ、別に魔物が怖くてこの街から一步も出れないなんてことはないんだよッ！」

そんなこと思ってるもんかッ！・・・たぶん。

「貴方に言いたいことがあります」

何かスルーされた。まあ、勘違いして無いならいいけど・・・。

「実は貴方は私の子ではありません」

やっぱり母さんは俺のこと分かってくれたんだ。

って、はい?? さっきなんとおっしゃいましたか?

俺が心底驚いた顔を見ると母さんが(勝手に)話し始めました。

「実は・・・」

とりあえず母さんの話によると・・・

俺は数日前、この世界に何故か突然(空から)現れました

そして町の外で倒れた俺を母さんが助けくれました

で、母さんが3日間手当してくれました

そして俺が目を覚ました

俺はその場の状況が理解できずとりあえずお決まりのセリフを言いました

俺が『ここは・・・?』って言って起き上がってきたから母さんが

『何言ってるの?ここは貴方の家よ』と言いました

んで、俺が続けて『貴方は・・・?』って聞いたらまた母さんが

『もう、記憶でもなくなっちゃったの?私は貴方のお母さんよ』と言いました

混乱していた俺はなんとなくその言葉を信じました。

・・・何これ？ 何の冗談ですか？

「そういうことなの、本当に御免なさい」

母さんは必死に謝っていた。

そんなに必死に謝るくらいなら、最初からそんなこと言わないで下さい。

というか母さんの言葉も無茶苦茶だけど、

それを信じて今まで（5日間）生きてきた俺もどうかしてるよなあ・

ってことは母さん、今まで俺を騙して・・・

あ、いやいや落ち着くんだ、俺ッ！ こんなときこそポジティブシンキング！

じゃあ、母さんはこっち側（異世界）の母って事にしよう！

うん、我ながらナイスアイディアだッ！

「貴方にはショックかもしれないけど、逝く前にどうしても真実を伝えたくて・・・」

あれ？ 何かおかしいな言葉がありませんでしたか？？

「あと、謝罪の気持ちとしてこれを・・・」

母さんはそういつて小さな袋を取り出し、俺に渡す。

「これは・・・？」

「貴方が装備とか宿とかに困らないようにお守り」

母さんは笑顔でそういつた。

俺はおそろおそろその袋を開けてみると・・・

そこに入っていた物は福沢諭吉が5枚！？

母さん、貴方が神に見えましたッ！！

「じゃあ、逝つてらっしゃい」

とりあえず、最後の言葉は聞かなかったことにしよう

人の話はちゃんと聞きましょう。(前書き)

相変わらず訳が分からないサブタイトルですが、
い w 気にしないで下さ

人の話はちゃんと聞きましょう。

まずこんなにゴールドがあるんだから装備を買おう

とりあえず今は自分が何処から来たとか、

何で来たとかはあんまり考えないことにしよう

考えると混乱するし・・・

そのうち分かるだろうってことで放置。

てか、始めっから3万Gも持つてる主人公はどのド○クエにもいいよね・・・？

まあ、どうでもいつか♪

数分後

俺は武器屋に向かって歩いていて後ろから誰かに声をかけられた。

「当店のオススメはこの銅の剣でござ^んいます」

いきなり！？ それ第一声で言う言葉ですか？

しかもここ店じゃないよね？ 道の真ん中で商売してる人見たの初めてだよ

とりあえずこんな怪しい人から買う気ないから何とか断らないと・・・

・

「あ・・・あの〜?」

「これは一見普通の剣に見えますが実は凄い力を秘めているんです」

え? 無視!? (一応) 商人なら客の言葉にもっと敏感になれ!

ってどこからどう見ても普通の剣だよ!

「もしも〜し?」

「ただの凡人には分かりませんが貴方のような素晴らしい人にはきつと分かるでしょう」

この人は人の話を聞くことが出来ないのだろうか

俺も一応凡人ですけど・・・

「お〜い!」

「今ならたったの3万Gでどうです?」

こんなに大声で叫んでるのに聞こえないんですか!? 無視は無しだよ!

しかも高いよ! 銅の剣だけで3万Gとか聞いたことないよ!

「おい!そこで何やってんだ!」

誰かが武器屋から出てきた。　　うわぁ、ごっついおっさんだぁ・・。

「・・・またお前か」

ごっついおっさん（以下強男）が怪しいおっさん（以下怪男）を睨んで言った。

すごい迫力・・・。

「・・・チッ」

すると怪男が逃げるように去っていった。

「おい、兄ちゃん大丈夫か？」

強男が特に心配して無いと言う顔で聞いてきた。

「あ、はい。だいじょ・・・」

「あの野郎この辺でいっつもくだらねえもん売りつけてんだよ」

遮られた。　　最後まで言わせてくれよ！

「お前武器が欲しいんだろ？」

俺は何にも言ってますん。

「だったら俺の店に寄ってきな！」

俺に断る権利はありません。

「俺のオススメはこれだな」

店に入るなり強男がある物を持ってきた。

「聖なるナイフってな、魔物を切るのにちょっと適したナイフなんだ」

要するに普通より少し強いナイフってことですね。

「たつたの200Gだ。買っていくか？」

まあ、200Gだったら安いから別にいいか♪

「じゃあ・・・」

「まいどあり！」

俺はまだ『じゃあ』しか言っていないよ？？

その後、防具屋で鱗の盾と木の帽子買って、
道具屋でキメラの翼1個、聖水3個、毒消草^{どくけしそう}3本、薬草を（とにかくいっぱい）買った。

何？ 薬草は大切だよ？ 無かったら怪我したとき大変だよ？ そ

れにきつと痛いよ？

臆病とか言っなッ！　ただ痛いのが嫌なだけだッ！

男の子なんだから我慢しろって？　んなこと知るかッ！

あと2万Gも残ってるんだから別にいいだろ！

人の話はちゃんと聞きましょう。（後書き）

自分で書いてて思うんですが、終わり方がかなり雑ですね。

あと、話が良く分らないと思うのですが、大丈夫でしょうか？

それと完全にパクルのはちょっと嫌だったんで無理やり漢字に見ました。

次話の投稿は少し遅れると思いますが気長にお待ち下さいw

人のことを臆病とか言うのは止めましょう。

よし！ とりあえず装備も買ったし、薬草も買ったからいいよ冒険の始まりだ！

でも、何でだろう？ 足が言うことを聞いてくれない！

あと、一歩で街を出れるのに足が動かない！

あ、決して怖くて前に進めないってことじゃなんだよ！？

きつと誰かに足が動かなくなる呪文をかけられてるんだよ！・・・
たぶん。

と、とりあえず、一歩街を出たらいいんだ。そしたら後戻りはできなくなるから！

ならいつそ目を瞑って一歩を踏み出そう！

そうだ、俺ならいける！ 俺は強い子なんだ！！

フニッ

何この音？ まさか俺の足跡？？

そんな！ いくら俺が弱いからってそんなの・・・

「ピキーーー！ 痛いよー！」

ん？ 誰？ 確か足元からしたような・・・

俺はおそろおそろ足元見ると、何やら青いものが・・・

「うわぁッ！」

「いじめないで！ 僕悪いスライムじゃないよ！ ついでに僕の名前はスラリンだよ」

いじめてません。 貴方が勝手に踏まれたんです。

あと、ついでに自己紹介しないで下さい。

というかいつからここにいたんだろう？

「僕強いスライムになりたいんだ」

スラリンが勝手に話し始めた。

この世界の人（魔物）達は勝手に話し始めたり、人の話を聞かないのが普通なんだろうか？

「お兄さんって旅人なんでしょ？」

・・・たぶん。

「お願い！僕と一緒に連れてって！」

うーん、どうしよう・・・。

まあ、一人よりはいつか♪

「別にいいけど・・・」

「ありがとう！僕、一生懸命頑張るね！」

『スラリンが仲間になった！』

「そついえば旅人さんの名前聞いてなかったよね？」

スラリンが突然そんなことを聞いてきた。　そついやまだ言っ
てなかつたわけ・・・？

とりあえず聞かれたことは答えておこう。

「俺の名前は・・・」

「あ、見て！　魔物が来たよ！」

どうやら聞く気がないらしい。　・・・って、ん？　今魔物つて言
いましたか！？

気付けば目の前に魔物がいた。

『スライムが現れた！』

「旅人さん！　僕が魔物たちを引き付けてる間に逃げて！」

言われなくてもそうさせてもらう！ 見てろ！ 俺の華麗な逃亡劇を！！

『俺は逃げ出した！』

『しかし、まわり込まれてしまった！』

何故だ！ 何故俺の必殺技が効かないんだ！？

こうなったら戦うしかない！ よく見たら俺の前にいるのはスライム一匹じゃないか。

何を怖がる必要がある？

あと、向こうを見たらスラリンが2匹のスライムと戦っているように見えるが

あれはきつと幻覚だ！

「ピキーー！！」

スライムが威嚇（？）をした。

調子に乗ってスイマセンでした！ って、何を全力で謝ってるんだ俺は！？

とりあえず、一旦落ち着こう。こんなときに焦るのは良くない。

じっくり落ち着いて・・・。

『スライムの攻撃！』

ザクッ

『俺は3のダメージを受けた！』

左腕に物凄い痛みが走った。　ぎゃああああ！　噛まれてる噛まれてるよ！！

というか、噛まれただけでこんなに痛いのか？

『俺は薬草を使った！』

『俺の傷が回復した！』

俺は全力でスライムを振り払って、すぐさま薬草を使った。
便利だね、薬草って。
・
・
・

『スライムの攻撃！』

そんなことを考えてる間にスライムが再び攻撃してきた。

一度受けた攻撃はもう受けないぞ！

『俺はひらりと身をかわした！』

もう、あれこれ考えてる暇は無い。

俺は持っていたナイフ（聖なるナイフ）で斬りかかる。

『俺の攻撃！』

フニッ

ん？ またこの音？？ 今度は何・・・って、え！？

『ミス！ スライムはダメージを受けない！』

見るとスライムがプニプにした体で俺のナイフを受け止めていた。

うおッ！？ なんて弾力なんだ！ ある意味最強じゃないか！！

「ピキーー！！」

『スライムの攻撃！』

スライムの攻撃で俺は突き飛ばされた。

『俺は2のダメージを受けた！』

自分の弾力を利用して俺を突き飛ばすなんて、ただのスライムじゃないな！？

俺が起き上がろうとしたら、スライムが突撃してきた。

チッ！ このままじゃスライム如きに負けてしまう。

『俺の攻撃！』

俺はとっさの判断でナイフを投げた。すると見事にスライムに当た

った。

グサッ

『会心の一撃!』

「ピ・・・、ピキキ・・・（ふ・・・、お前なかなかやるな・・・」

つつ・・・、突き刺さった・・・。

しかも何か変な声が聞こえたような気がする。・・・スライムから。

人のことを悪く言うのは止めましょう。(前書き)

今回のサブタイトルは、ほぼ前のパクリです。

話自体もそんな進んでないのでこれしか出てきませんでした。

人のことを悪く言うのは止めましょう。

と・・・、とりあえずナイフを回収しよう・・・。

俺はナイフを回収するために動かなくなった

青い物体スライム（もはや液体っぽい物）の元へ向かった。

ナイフがドロドロの液体と一体化しかけているためか、ナイフがなかなか抜けない！

俺が悪戦苦闘をしていると、スラリンがこっちにやって来た。

『スライムをやっつけた！』

「旅人さん！」

『3の経験値を獲得！』

「よかったあ、無事だったんだね」

『6ゴールドを手に入れた！』

・・・さっきからなんですか、これ→？

というか、お金や経験地はどうなるんですか？？

それよりこの声みたいなのはどこから聞こえてくるんですか？？？

「旅人さん？どうしたの？」

俺はスラリンの言葉で我に返った。

そつえばなんだか手の辺りが妙に冷たい。

何かいるんだろうか・・・？

この冷たさは・・・もしかして・・・幽・・・？

いやいやいやいや、それは無い！　というかあつて堪るか！！

大体、こんなフィールドで幽○なんか出てくるか！！

いや、魔物ならありえるのか・・・？

いや、いくらなんでもこんな序盤で出てこないよね！？　4なら・・・。

とりあえず俺はその正体を確認するためにおそろおそろ自分の手を見た。

ん？　青い液体・・・？？

俺はとりあえず頭の整理を試みた。

どうやら俺がいろいろ考えてる間に一体化が進んでいたようだ。

もはや俺までが一体化しかけて・・・って、はい？　なんです

か、この状況は！？

俺は慌ててナイフを握っていた手を放す。

危なかった・・・。

スラリンが声をかけてくれなかったり、

俺の頭の整理時間が長かったら俺は今頃これと一体化してるところだった。

だが、この行動のせいで一つ大きな問題が出来た。

それはもう言わなくても分かると思うが、俺は武器を捕られてしまった。

なんとということか！ 最後の最後で俺から武器を奪うなんて・・・
なんてスライムなんだ。

あ、俺の自業自得じゃないぞ！？ 決して！！

とりあえず、これからどうしよう？

俺としては1秒でも早くどこかの村に行きたいんだが、
辺りを見回しても一面の野原しか見えない。

しかも、下手に動いたら敵と遭遇してしまうだろう。

俺がどうしようか考えている間に、スラリンが何かを見つけたようだ。

「旅人さん、見て！ あそこに宝箱があるよ！」

そんな馬鹿なことがあつて堪るか・・・。

幽○説の次はこれかよ！？

スラリン、お前は馬鹿ですか？

スラリン、きっとそれはお前の幻覚だよ・・・。

俺がスラリンに言おうとした瞬間、俺の目に何かが映る。

それは何処からどう見ても、正真正銘の宝箱である。

・・・なぜ？

人のことを悪く言うのは止めましょう。（後書き）

とりあえずちよいネタバレしてますがキャラ紹介です。

『アラン』

本名：亜吉良 あきら 純 じゅん 職業：高校生／勇者・・・？

年齢：16歳（高2） 血液型：O型

@詳細@

ゲームは基本的に恋愛系などの女物以外ならなんでも得意。
特にファンタジー系が好き。

機械にものすごく強く、見たことも無い機械を約10分～30分で
扱うことが出来る。

勉強は

めんどくさい事が嫌いでもめんどくさい事が起ければ（あれば）全て
人任せ。

どんなときでも楽な人生を選びたがる。ちなみに二日坊主。

自分にとって都合が悪いことがあれば、その場から逃走する。

高いところが苦手 〃 高所恐怖症。

痛いこと・怖いことが苦手 〃 臆病者・小心者

前向きな考え（ポジティブシンキング）／現実逃避が得意。

@一言@

名前はド○クエ4の主人公の名前が『アラン』だったんで、それを
付けました。

アランに『き』と『じゅ』を足して、あらかじゅんになりました。
漢字は適当です。『あ』と打って『亜』に、『きら』と打って『吉
良』と。

（基本的には普通ですが）なんか変なキャラになってしまいました。
主人公がこれでいいのでしょうか？

悪魔の誘惑に騙されてはいけません。 (前書き)

徐々に主人公が壊れてきているような気がします。

悪魔の誘惑に騙されてはいけません。

って、そんな馬鹿なことがあつて堪^{たま}るか！

まだ、洞窟や塔などに宝箱があるのは分かるが、
こんな所で宝箱などあるはずが無い！
フィールド

そんなことがあつていいのは（俺が知る限り）ドクエ8だけだ！！

もし、この場所^{フィールド}に宝箱があつたとしても
街や洞窟などが主人公達より小さいという状況で宝箱で状況で
宝箱など見えるはずが無い！！

【・・・とりあえず落ち着け】

俺が一人混乱していると不意に誰かの声が聞こえた。

え！？ 何！？ 誰！？

「誰ですか！？」

俺は反射的にさっきの声の主に聞く。

【そして現実逃避は止める】

無視ですか？？

そつえば今まで会ってきた人にことごとく無視されているのは気

のせいかな？

その前にこの世界自体が現実じゃないんだが・・・。

【そんなことを考えていたって実際にあるんだから、もう認めるしかないだろ？】

というからお前は俺の心の中が見えるのか・・・？

というか何処から話してるんですか？？

【もう、諦めろ！　ここは異世界だ、何があってもおかしくない！】

さっきから貴方は誰なんですか？？

【俺か？　俺はお前の心の中にいる悪魔だ】

道理で声の主が見当たらないわけだ。それなら俺の考えが分かったことも納得できる。

そういえば悪魔がいるんだったら、天使もいるのでは？？

だとしたら天使の意見が聞きたい。　悪魔よりは絶対に良い案が浮かびそうだ。

【天使なら今世界一周旅行中だ】

どうやら俺の心の中の天使は外出中らしい。

というかお前は俺から出て自由に動き回れるのか？

そういえば今思ったんだが、俺には街や洞窟、森などどのように見えるのだろうか？

この辺には野原しかないから分らないけど・・・。

ゲームではプレイヤー（俺）が客観的に見てるから

街や洞窟などが主人公より小さく見えているわけだが、俺は今その世界に入り込んでいるわけである。

まあ、街に着いたら分かるからいつか。

てか、そんなことよりもこの宝箱は・・・

はッ！？　もしかしてこれは

武器の無い俺にどこかの優しい神様からの贈り物ではないか？

だとしたらこの中には何か武器が入っているのではないか？？

いや、むしろそうだとしか考えられない。　というか、考えたくない。

じゃないと、こんな良いタイミングで（しかもフィールドで）宝箱が現れるなんて考えられない。

それはお前の頭が馬鹿だからじゃないのか？とか思った奴、何もし

ないから出て来い！

【俺は現実逃避を抜け出して、現実逃避に逃げ込んだ！】

黙れ、悪魔！ これは現実逃避じゃない！ ポジティブシンキング
っていうんだ！！

とりあえず、宝箱を開けてみよう。

『俺は宝箱を開けた！』

よし、来い！ 俺の相棒^{ふき}よ！

『なんと天空の剣を手に入れた！』

・・・これは予想外である。

悪魔の誘惑に騙されてはいけません。 (後書き)

後書き キャラ紹介PART2！

『スラリン』

本名(?)：守羅鈴(適当ですw) 職業：魔物

年齢：不詳(人間にするとたぶん12歳くらい)

血液型：スライムに血液はあるのでしょうか？(人間にするとたぶんA型)

@詳細@

心が強く、優しい人(魔物)が好き。悪い人(魔物)を嫌う。

この世界の誰かの不思議な力によって人の言葉が話せるようになり、

(約1時間だけだが)人の姿になることが出来る。

@一言@

世界のどこかの誰かは今のところ貴方のご想像に任せますが、ちゃんと決まっています。

ちなみにホイミンも出て来る予定です。

よく考えてから行動しましょう。(前書き)

主人公だけじゃなく、話自体が壊れてきました。

よく考えてから行動しましょう。

これは幻ですか？ それとも現実でしょうか？

俺が放心状態になっていると、

スラリンが宝箱の中に入っていた一通の手紙を持ってきた。

「旅人さん、まだ何か入ってるよ？」

そして、それを俺に渡す。

手紙の内容はこうだ！

勇者様へ

初めまして、勇者様。

この宝箱の中身、どうでしたか？

いきなりで驚かれたと思いますが、それは本物ですよ。

こんな序盤で出てくるのはおかしいと思いますが、こちらにもいろいろありまして……。

まあ、大切にしてください！

P.S.

早く魔王を倒してこの世界から消え……た平和を取り戻してください。

この手紙は一体……？　　といういろいろって何！？　　何があったんですか！？

あと、P・S・で早く消えて下さいと言われたような気がしたけど気のせいでしょうか？

というか俺は勇者なのか……？？

もうその時点から疑問だ。

俺はこれを装備できるのだろうか？？　　勇者かどうか不明だから分からない。

とりあえず装備してみよう。

『俺は天空の剣を装備した』

一応装備出来るらしい。

『天空の剣には呪いがかけられていた』

何で天空の剣に呪いがかけられてるんですか！？

「旅人さん、もう一通手紙が入っていたよ」

俺はスラリンが持ってきた手紙を略奪し、すぐさま内容を見る。

書き忘れていましたが、

天空の剣には魔王を倒せなかった勇者達の呪いがかけられます。

大丈夫です。特に害はありませんから。

ただちょっと幻覚が見えたりしますが大丈夫だと思います。

あとは他の武器が装備できなくなったり、その他いろいろです。

まあ、でも勇者ならそれくらいのハンデがあつたっていいでしょ？

せいぜい頑張りやがれ！

書き忘れないで下さい。

だいたい勇者の呪いって何ですか！？ 勇者ならきれいに成仏して下さい！

特に害はありませんからって言われても安心できません！！

幻覚が見える時点で大丈夫じゃありません！

というかその他いろいろって何ですか！？ 何が起こるか気になるじゃないですか！

そのハンデがあったからみんな魔王に負けちゃったんじゃないんですか！？

あと、最後の文酷くないですか！？

・・・全ての文に対して突っ込んだ気がする。

よく考えてから行動しましょう。（後書き）

今回の話はいつもとより短くなってしまいました。

というか話が全然進みません。この調子で魔王を倒すまでいけるのでしょうか？

先が不安になってきました。

まあ、グダグダ進めていきますw

精神を強く持ちましょう。(前書き)

擬人化入ります♪

精神を強く持ちましょう。

とりあえず街に行きたい。そしてこの呪いを解きたい。

そういえばさつきから俺の頭上に3mくらいの黒いドラゴンが飛んでいる。

誰・・・いや、何だこれ！？ これは本当にこの世の生き物なのか！？

どこのド○クエでも見た事が無いぞ！？

というかこれは幻覚だね？ 頼むから幻覚であってくれ！！

勇者達はこんなのと戦ったのか！？ 俺なら本物を見ただけでノックアウトだよ！！

あと、なんとなくこの剣が俺を拒絶しているような気がする。

いつの間にかスラリンが消えている。どこに行ったんだろう？

「旅人さん、向こうの方に村があったよ」

お前はなんでも探し屋か・・・って、いつの間に戻ってきたんだよ！？

というかお前は一応俺の仲間パーティーだよな？

パーティー仲間が勝手にどこかに行っていていいのか？

もし、そんなことが出来るならラスボスのときに仲間が多分全員揃っていないだろう。

最悪の場合、主人公が一人でラスボス戦だ。それは非情に困る。

なんだかんだで数分後に村に着いた。

途中2〜3回ほど戦闘があつたが、普通に戦えた。

この剣の攻撃力も普通の天空の剣と同じくらいだ。

今のところステータスが下がったり、状態以上になつたりもしない。

ただ一つおかしい所があるとすれば、

敵の攻撃のときにそれに合わせて幻ドラゴンが俺に攻撃してくるくらいだ。

そのせいで、恐怖で体が動かなかったり（＝麻痺）、

たまにドラゴンに攻撃してしまったり（＝マヌーサ）してしまう。

あと、（精神的に）ヒットポイント体力が削られていつてる（＝毒）ような気がする。

いや、別に幻覚だから攻撃されても痛くは無いんだよ？

でもさ・・・、すつごく怖いんだよ！

なんかドラゴンと戦っているような気がして仕方ないんだよ！！

だって目の前にドラゴンがいるんだよ！？

しかもすごい形相で睨んでくるんだよ！？ 怖くないわけ無いじゃん！！

怖がりとか言うな！ あと気のせいとかも言うな！！

・・・まあ、いいや。とりあえず教会に行こう。

あ、そういえば一つ気になることが・・・。

「お前はどつするんだ？」

「え、僕？ 何で？？ あ、そっか！ 変身するの忘れてた！！」

俺がスラリンに聞き、スラリンが変なことを言う。

「ちょっと待ってってね、旅人さん」

スラリンがブツブツと何かを呟きだす。

おい！ 何をする気だ！？

俺が不安そうにスラリンを見る。

スラリンの呟きが終わると同時に、ポンという音と白い煙が出て

きた。

そして中から声がする。

「お待たせ♪」

現れたのは12歳くらいの少年・・・いや、少女だろうか？

見た目だけでは性別が分からない。

スラリンか！？ お前は人間になれるのか！？

「早く村に入ろうよ」

勝手に話を進めないで欲しい。

精神を強く持ちましょう。(後書き)

暇があれば挿絵でも入れときます。絵は苦手なので期待しないほうがいいですよ。

人生はマニュアル通りじゃなくていいんです。（前書き）

投稿遅れてスイマセン。これも全て夏風邪が原因です。私の大事な時間があいつのせいで消えていきました。今もまだ完全では無いのですが割と元気です。

人生はマニュアル通りじゃなくていいんです。

「アラシinイムルの村」

とりあえずこの村は名前は何だろう。近くの人に聞いてみよう。

「イムルの村によっこそ！」

聞く前に言われた……。

俺の心の中でも見えるのか？ それともこの村の決まりだろうか？

できれば後の方であって欲しい。じゃないといろいろ困る。

……イムルってことはライアンのところか。

まあ、とりあえず教会に行こう。

俺が教会に向かっていると、スラリンが何か言いたそうに俺を見上げていた。

「どうした？」

「あの……僕あっち行ってみたいんだけど……」

いきなり仲間解散の危機が……。

パーティー

「……好きにしろ。その代わり村から出るなよ」

この村から出られたら本気で困る。

「ありがとう、旅人さん！」

本当にボス戦が危ないかもしれない。

とうにかこいつはいつまで俺のことを『旅人さん』と呼ぶ気だろうか？

くアランin教会く

「頼もしき神のしもべよ。わが教会にどんなご用じゃな？」

ゲーム通りのセリフだ。

これを聞くと何故が落ち着くのは今までがゲーム通りじゃないからか？

「呪いを解いてください」

「どなたの呪いを解くのじゃ？」

とことんゲーム通りだ。

やっぱりここはゲームの世界なんだという実感が湧いてきた。

「俺しかいませんよね？」

「さすれば我が教会に5000ゴールドのご寄付を。よろしいですかな?」

こんなゲームは存在しない。序盤でこの金額は高すぎる。

「おお、神よ。お力を！ 忌まわしき呪いをアランより消し去りたまえっ!」

俺はまだ承諾した覚えはありません。勝手に話を進めないで下さい。

タララララーラー

どこからともなく音が聞こえてきた。

その瞬間、俺の右手（剣を持っている方の手）に激痛が走る。

まるで俺の右手に電流が流れている感じだ。しかもバチバチという音が聞こえる。

とりあえず神父さんに助けを求めよう。というかこれを止めてもらおう。

「神父さん、ストップッ！ 右手がすごく痛い！！ 何かバチバチいってるしッ!」

俺は右手を押さえながら必死に叫んだ。

「ほかにご用はありますか?」

「ありません！ それより早く助けて下さい!!」

無視ですか？ 今のところ俺の話を1回も無視して無い人はいないんじゃないですか？

「ではお氣をつけて。 神のご加護のあらんことよ」

「勝手に終わらせるなよ!!」

そして・・・

「・・・おかしいですね？ これで解けない呪いなんてないのですが・・・」

「やつと対処してくれるんですね。でも貴方がもたもたしてる間に痛みが消えてしまいましたよ？」

「すみません。一応ゲーム通りにしないと私の存在が消えるんです」
なんてマニュアル通りな世界なんだろう。

「ちょっと見せて下さいね」

神父さんは俺の右手を掴み、持ち上げる。

「すごいですね。これ・・・本物ですか？」

主語を入れてください。

「何がですか？」

「この剣ですよ。本物の天空の剣ですよ?」

「そうだと思いますが・・・」

これが偽物だったら俺は間違いなく切れるだろう。

「分かります。このとてつもないオーラ。正しく伝説の剣に相応しい」

というか剣のことより呪いの件についての回答を願います。

「でもなぜ貴方がこれを・・・」

この言い方からして俺は勇者じゃないのだろう。

「知りません。俺が聞きたいくらいです」

「この剣は勇者しか装備できないはずなのに・・・」

遠回し気味だけどはつきり言われた。

「神父さん、俺は一体何なんですか?」

「さあ・・・僕にも分かりません」

俺は未知の生物らしい。

「とりあえず魔王でも倒してみたらどうですか?」

『とりあえずコンビニにでも行ってきたらどうですか？』みたいなノリで言わないで下さい。

「大抵の異世界物語というのは魔王を倒したらもとの世界に帰ることが出来るそうです。」

だから貴方の場合も多分そうだと思います」

なんで貴方が異世界物語のことを知ってるんですか？

というか何故俺が異世界から来たことを知ってるんですか？？

「でもこれは普通の異世界物語じゃありませんよね？」

「そうですね。普通は主人公、つまり貴方が勇者のはずですが・・・

」

「・・・俺は勇者じゃない」

「まあとりあえず頑張ってくださいね、あきひ亜吉良 じゅん純様」

ん？ あきひ亜吉良 純ってどこかで聞いたことが……。って俺の本名じゃねえか！？

やつと思ひ出せた……。じゃなくて！？

「何で俺の本名知ってるんですか！？」

「何故でしょう。ちなみに僕は『あきひキイト』こと『あきひ亜吉良 かいと海斗』です」

・・・どうやらこの神父さんは俺の弟のようだ。

ずるい事はいけません。

とりあえず一番聞きたい事を聞いておこう。

「どうしてお前がここに!？」

「そんなの決まってるじゃないですか。馬鹿な兄を助けに来たんですよ」

馬鹿で悪かったね・・・。

俺が言い返そうとしたその時、外から女性の悲鳴と叫び声が聞こえた。

「きゃあああッ!」

俺達は急いで外に向かった。

本当は行きたくないんだけどね・・・。

何故かって? だって何か嫌な予感がするからです。別に怖いとか思っただけよ?

「だッ誰か助けてくださいッ!」

外に出てみると一人の女性が何かを指差して叫んでいた。

女性が見ている方には子供と魔物が2匹。・・・って、ちょっと待

って下さい。

あれ大目玉とピサロの手先じゃないですか!?

なんでこんなところにいきなりボスがいるんですか!?

というか引きずって悪いけどまた幻ドラゴンが頭上を飛んでいる。

しかも子供を連れて行こうとしている。貴方は一体何がしたいんですか?

「私の子供が・・・ッ!」

なんかもう原作無視してるじゃないですか。

「兄さん、どうします?」

「大丈夫だ。きっと後で救世主が現れるから」

正直関わりたくない。というか行きたくない。こついうことは誰かに任せるのが一番だ。

「もしかして怖いんですか?」

・・・図星です。けどそんなこと言えないので言い返そうする。

「そッそんなことは・・・」

「おい。その魔物。その子供を放せ」

俺の話を遮る＋無視ですか？ 徐々にレベルアップしてますね。

というか勇気ありますね。よくそんなことが言えましたね。

あと話し方が変わってます。貴方は誰ですか？

「なんだと！？」

魔物が怒って言う。・・・正直怖いです。

「・・・ってこの人が言っていました」

「・・・え！？」

何言ってるんですか！？ 俺は何も言ってますんよ！？

というかさっきのは俺のセリフを真似たから話し方が変わってたんですね・・・。

でも俺はあんなこと言いませんよ？ 絶対に！！

「なんだと小僧。言ってくれるじゃないか？」

だから俺は何にも言ってますんって！？

『ピサロの手先と大目玉が現れた』

いきなり戦闘モード！？

「僕が援護します」

当たり前だ。こいつが勝手に言ったのに無視するなんてことしたら後でぶん殴ってやる。

というかスラリンがいない。本当にボス戦で来なかった。なんて奴だ。

とちあえず攻撃しとこう。じゃないと戦闘が進まない。

『俺の攻撃！』

いきなりボスは攻撃しない。それが俺のポリシーさ。

・・・かつこつけてスイマセン。実はボスに攻撃するのが怖いだけです。

だって凄い顔で俺のこと睨んでくるんですよ!？

怖くないわけ無いじゃないですか!!

『大目玉に40のダメージ!!』

・・・流石天空の剣。攻撃力だけは凄いな。 とうかがよく生きてますね。

「ねえ兄さん、僕は一体何をすればいいんですか？」

「とりあえず作戦は『俺に任せろ』でッ!」

「ええ！ 兄さん命令してくれないんですか！？」

お前も少しは苦勞しやがれ！

というかお前が何が出来るか分からないから命令出来ないだけなんだけどな。

「じゃあ、見よう見まねで行きますよ」

『キイトはバイギルトを唱えた！』

『俺の攻撃力が2倍になった！』

序盤でこれを使えるキャラは見たこと無い。

『ピサロの手先の攻撃！』

『俺は10のダメージを受けた！』

『大目玉の攻撃！』

『俺は3のダメージを受けた（ 以下省略 ）』

省略しないであげて下さい。 可哀そうじゃないですか。

もうこれすらも原作離れてんじゃねえか！！

というか以下省略ってことはずっと変わらないって事ですよね？

てことはずっと俺に攻撃してくるんですか？

それだと俺も可哀そうじゃないですか!?

そつだとしたらやらなきゃいけないことがある。

「作戦変更だ! 『命令させろ』で行く!」

「兄さん、やっと指示くれるんですね」

「とりあえずスカラかスクルト使えるか?」

軽く無視してみた。さっきの仕返しということで……。

「分かりました!」

『キイトはスカラを唱えた!』

『俺の守備力が100増えた!』

増えすぎです。序盤でそんなに増えたらほぼ無敵じゃないですか。

『俺の攻撃!』

『大目玉に80のダメージ!』

流石バイギルトと言いたい所だけど……。

これは何処の戦いですか? これは本当に序盤ですか??

『大目玉を倒した!』

・・・なんか可哀そうなので先に倒しました。

『ピサロの手先の攻撃！』

『ミス！俺はダメージを受けない！』

そりゃそうです。普通はそうなるはずです。

とうにかさつきから俺しか攻撃されて無い。

『キイトはルカニを唱えた！』

『ピサロの手先の守備力が100下がった！』

今度は下がりすぎです。もうこれは序盤の戦闘じゃないです。

とうかこれはチートじゃないですか。チートは良くないですよ。

『俺の攻撃！』

『ピサロの手先に200のダメージ！』

『ピサロの手先をやっつけた！』

バイギルト＋ルカニの威力って凄いですね・・・。

とうか何でこんなにキリのいい数字ばかり並んでるんですか？

『俺は100の経験値を獲得！』

凄く早く終わったような気がする。

『10ゴールドを手に入れた!』

少なッ!　どんだけケチなんですか!?

・・・とりあえず初のボス戦で勝利しました。

ずるい事はいけません。（後書き）

登場人物紹介PART3

『キイト』

本名：亜吉良 海斗^{あきら かいと} 職業：高校生／神官？
年齢：15歳（高1） 血液型：A型

@詳細@

真面目でしっかり者。どんな事でも真面目にコツコツするタイプ。目立つことが嫌うため、よく縁の下の力持ちになる。努力をせずに楽しようとする人が嫌い。勉強は文系が得意。静かなところで読書をするのが好き。

@一言@

主人公の弟の一人です（あと2人いますよ）。名前は言いませんが予想しようと思えば出来ます。なんていったって3つ子ですからね。海とくれば・・・？って感じですね。ちなみにこの子が一番しっかり者です。

人生はいつ何が起るかわかりません。

・・・何？ この状況？

「なんとか勝てましたね・・・」

海斗が俺に向かって言う。なんだかかなり疲れているようだ。

かなり余裕で勝ったような気がするのにお前は一体何をしたんだ？
というか勝ったのに全然嬉しくないのは俺だけだろうか？

「人間如きに敗れるとは・・・」

俺が妙な気分になっているとピサロの手下（以下ボス）が急に話し出した。

「だがきつと他の魔物たちが勇者を探し出し、その息の根を止めることだろうよ・・・」

「お前達人間はやがて帝王様の生贄となるのだ。地獄で待っているぞ・・・ぐふッ！」

こうしてボスは消えていった。あくまでこういうところだけは原作通りなんですね。

俺が消えていくボスを見てると一人の凄く嬉しそうに女性が近づいてきた。

この人はさっき叫んでいた人じゃないか。何かお礼の品とかくれるのかな？

「ありがとうございます！ 貴方のおかげで私の子供が助かりました」

「いえいえ、そんな大したことでませんので」

実際にそんな大したことはしていない。こっちはほとんど無傷だ。

「お礼にこの天空の兜を差し上げます」

・・・もうどうしたらいいんですか？

確かにお礼の品はくれると思っていましたがこれは予想外です。

もうどう反応したらいいかわかりません。

というか何故持ってるんですか！？ 貴方はただの一般人ではないのですか！？

こんな序盤で伝説の装備が2つも手に入っているんですか！？

「大事に使ってくださいね」

俺が混乱していると、その女性が笑顔でそういつて兜を無理やり俺に渡す。

何故無理やり渡すんですか？ ・・・なんだか嫌な予感がするんですが。

「なんだか危険な臭いがしますね。呪われてるんじゃないですか？」

海斗が兜を見て言った。・・・俺もそう思います。

「どうします？ 装備しますか？」

「とりあえず一か八かで装備してみる」

何の一か八かなのだろうか。俺にも理解できない。

多分90%の確率で呪われているだろう。

『俺は天空の兜を装備した』

『天空の兜には呪いがかけられていた』

・・・やはりそうでしたか。

不意に何処からか声が聞こえた。

【初めまして。僕は兜の中に住んでいる呪いです】

呪いに自己紹介された。

【今日から貴方の頭の中ですごすことになりました】

正直止めてください。

【これからよろしく願いますね】

・・・これからどうしよう？

「兄さん、何か変わったことがあります？」

海斗が心配そうな顔で聞いてくる。一応兄を心配することは出来るようだ。

「今日から俺の頭の中に呪いが住むそうだ」

「・・・どういことですか？」

「・・・俺に聞くな」

俺にも分からないことを人に教えるのは不可能だ。

不意に見覚えがある姿と聞き覚えがある声が・・・。

「旅人さん、ここで一体何があつたの？」

貴方は何も知らないんですか？　　どんだけ鈍感なんですか!？

多分ここにいるほとんどの人が知つてると思いますが・・・。

「あのね、旅人さん。もうすぐ1時間が経つんだ」

スラリンが急に話し出した。

というか貴方は自分で聞いてきたのに答えを聞かずに話し出すんですね。

「僕1時間しかこの姿になれないんだ。だからね・・・」

「よし分かった。もうこの村を出よう」

正直ここにいてら何か厄介なことになりそうだ。

だって本来ライアンが倒すはずの敵を倒しちゃったし・・・。

「僕も行ってもいいですか？」

「ぜひ来て下さい」

即答してやる。こいつがいないと俺が危ない。

スラリンはすぐに俺を見捨てるから・・・。

【次の村に行くんですか？だったらいいところがありますよ。案内しますね】

・・・こいつは案外役に立つかもしれない。

人生はいつ何が起こるか分かりません。(後書き)

次は5の内容に突入ですw

ちよこつと番外編／その後のライアン／

第一章 王宮の兵士達

これはバトランドという小さな国の王宮兵士の物語。

ライアンつまりあなたもその王宮兵士の一人でした。

ある朝 王様は兵士達をお城の広間に呼び集めました・・・。

大臣「これより王様からそなた達にお話がある。 心して聞くように。」

王「皆の者 楽にしてよいぞ。」

王「さて 話というのは他でもない。」

王「最近子供達がいなくなるという噂はお前達も聞いておろう。」

王「だがある若い少年達がその元凶となる者を倒してくれたのだ。」

王「だからもう何も心配はいらぬ。 今まで通りこの国を守ってくれ。」

王「ゆけ！ 我が戦士達よッ！

こうしてライアンはずっとこの国を守り続けました。

めでたし めでたし。

ちよこつと番外編／その後のライアン（後書き）

ちよこつとトーク

ア「・・・これってめでたしでいいのか？」

ス「でもライアンさんはきつと国のために戦えて幸せだと思っよ？」

ア「いやいや国より世界のために戦えた方が幸せだって！」

キ「そうですよ！国を守って死んだなんて凄くかつこいいじゃないですか！！」

ア「なんで過去形なんだよ！まだ死んでないぞ！！」

キ「あれ？そうなんですか？」

ア「そうだよ！どこに死んだって書いてあるんだよ！」

？「すごい思考回路だね」

ス「思考回路って何？」

キ「じゃあこれから死ぬんですか？」

ス「思考回路っておいしい？」

ア「死なないよ！ライアンは世界のために戦って帰ってくるんだよ！！」

？「うん。美味しいよ」

キ「へえ、凄いですね」

ス「そうなんだ！一回食べてみたいなあ」

ア「・・・なあ、後ろで凄い会話が聞こえてくるんだが・・・」

キ「・・・そうですね。ところであの子は誰ですか？」

ア「言われてみれば・・・」

？「はあ、ライアンさんが旅に出てくれないと僕の出番が・・・」

ア「ストップ！その奴！今出てくん。お前の出番はまだ先だ」

キ「すごい普通いましたね」

？「みんなあ、次の内容は僕が出てくるからね」

ア「宣伝すんな！とつとと帰れ！！」

終 変な終わり方でスイマセン・・・。

くおまけく 今のレベル

『アラン』

LV:4 HP:40 MP:20

力:15 素早さ:15 身の守り:7 賢さ:5 運の良さ:1

攻撃力:130(剣なし:20) 守備力:40(兜なし:10)

《覚えている呪文》

ルーラ・リレミト・トラマナ

『スラリン』

LV:3 HP:34 MP:17

力:12 素早さ:13 身の守り:5 賢さ:2 運の良さ:3

攻撃力:20 守備力:10

《覚えている呪文》

『キイト』

LV:5 HP:40 MP:100

力:10 素早さ:17 身の守り:10 賢さ:30 運の良さ:

7

攻撃力:25 守備力:15

《覚えている呪文》

スカラ・ピオリム・バイキルト・マホカント・ラリホー、ラリホー
マ・メダパニ・マヌーサ・ルカニ・ボミオス・

話の流れに流され過ぎないようにしましょう。

・・・とりあえず近くの村に到着。

とりあえずここは何の村だろう？

「ようこそ アルカパの町に」

また聞く前に言われた。・・・何なんですか。

といつか4からいきなり5へいつちゃいましたね。

とりあえずやることがなかったので適当に歩いていると、一人の少女の声が聞こえた。

「止めなさいよ！ 可哀そうでしょう。 その子を渡しなさい！」

・・・はい、ピアノ力です。 おまけに隣には主人公がいます。

「おい、この猫を渡せって。 どうする？」

「そうだなあ。 いじめるのも飽きてきたし、 欲しいならあげてもいいけどさ」

「そうだ！ レヌール城のお化けを退治してきたならなッ！」

「そりゃいいや！ レヌール城のお化けと交換だな！」

「こうなったらお化け退治をするしかないわね」

少年達の元から離れてビアンカが言う。

「アベルも手伝ってくれるでしょ？」

「僕は行かない」

やる気の無い主人公だ。俺も人のこと言えないが・・・。

「そんなのダメよ！ 私がついてるから大丈夫。ねっ、一緒に行きましょう！」

・・・強制連行だ。主人公っていうのはどうしていつもこういう目に遭うのだろう？

「ねえ旅人さん、僕達もお化け退治に行こうよ！」

スラリンの眼が輝いている。こうなったら行くしかないのだろうか？

「いいですね。だいたい子供2人じゃ危ないですし・・・」

・・・もう無理だ。1対2では敵わない。

「ところで君は誰？」

今さらかよ！！ 今まで普通にいましたよね？

「僕はですか？　僕はキイトです」

「そうなんだ、僕はスラリンだよ。よろしくね」

「はい。よろしく願います」

【レヌール城に行くんですか？　それならここからずっと北にありますよ】

「ご親切にどうもありがとうございます。」

「今から行こうよ！　僕も待ち切れないよ」

「え、今から行くんですか？　お化けは夜にならないと出てこないと思うんですが・・・」

「えー？　そうなの！？　じゃあ夜になったらすぐに出発だね」

「あなたは一体そこに行って何がしたいのでしょうか？」

「というかさっきから勝手に話が進んでる。」

「ちなみに俺はこの村に来て一回も言葉を話していない。心の中で突っ込んでいるだけだ。」

「兄さんも手伝ってくれるでしょう？」

「俺は行かない」

「そんなのダメです！　僕もついていきますから大丈夫です。だから

一緒に行きましょう！」

あなたはピアノ力ですか。しかもさっきの会話とほとんど一緒じゃないですか。

・・・というかあなたがいたら別の意味で怖いです。

「じゃあ今のうちに寝て起きましょう」

・・・これからどうなるんでしょう。

話の流れに流され過ぎないようにしましょう。（後書き）

5に入りました！でもまた4に戻る気です。たぶん交互になると思
います。内容は気まぐれです。私がしたいところだけです。さす
がに全ては出来ないの。・・・正確にはただ私のやる気がないだ
けです。すいません。ちなみにして欲しい内容などがありましたら
行って下されば【出来る限り】やろうと思ってます。まあ、とりあ
えずこんな私ですが頑張りますんで、応援よろしくお願いします。

時には行動することも大切です。(前書き)

途中の説明がかなりアバウトです。

時には行動することも大切です。

その日の夜・・・

「兄さん 起きて下さい・・・。 兄さん・・・。」

誰かが俺を呼んでいる。 いや、起こそうとしている。

だがこれで起きてしまえば地獄に連れて行かれる。俺はそんなところには行きたくない！

「こうなったら最終手段でいきましょう。スラリン、よろしくお願いします」

いきなり最終手段かよ！？ もっと考えてこなかったのか。

突然、スラリンが俺の上に乗っかる。

何をする気だろ・・・。息が出来ない。俺はとっさに顔からスラリンをどけた。

「俺を殺す気か！？」

「ねえ、早く行こうよー！」

「さあ、行きましょう」

無視ですか？

とりあえず何回か戦闘しながらレヌール城に向かった。

普通は何日かけて徐々にレベルを上げたり
ゴールドGを集めて装備などを買ってから行くもんなんだが・・・。

そしてレヌール城到着。

表側のドアに向かう。

『ドアは サビついていて 開かない!』

「困りましたね。どこか他のところから中に入れないでしょうか・・・」

やっぱりこいつはビアンカだ。

とりあえず城の裏側に回った。

そこには梯子があつた。その梯子を一番上まで上って中に入る。

すると今入ってきた入り口が鉄格子によつて塞がれてしまった。

それと同時に雷が鳴り響く。

「なんだか嫌な感じですね・・・」

・・・珍しく原作通りに進んでいる。

この話のことだから表のドアがいきなり開いていたり、梯子がなかったり、

鉄格子の代わりに何か変なものが出てきたり、雷が直撃したりしないか心配だったんだが……。

まあ、まだ油断は出来ないが……。

とりあえずそのまま進んでみる。

階段を下りようとした瞬間、棺桶がガタガタと動き出した。

そして突然起き上がり、棺桶たちがこちらに向かってきた。

「うわあゝッ!!」

もちろん叫びましたよ。原作を真似して叫びましたよ。

百歩譲って骸骨が向かってくるなら分かりますが、何で棺桶が向かってくるんですか!?

意味が分かりません。もうやりたいことが理解不能です。

だいたいどうやって動くんですか? どこかに足でもあるんですか?

『棺桶たちが現れた!』

そして何故戦闘モードに突入するんですか!?

「……何ですか、この状況は?」

・・・俺が聞きたいです。

「わぁ、すごいね！ 棺桶って動く物だったんだね！」

・・・実際は動きません。

「そっぴえばさっき新しい呪文覚えたから見ててね！」

『スラリンはニフラムを唱えた！』

『棺桶達を光の中へ消し去った！』

『棺桶たちはいなくなつた！』

すごいですね。全滅じゃないですか。というかこの棺桶って消してもいいんでしょうか？

「・・・なんだったんでしょうね？」

・・・もつ考えるのは止めよう。

時には手を抜いてみましょう。(前書き)

ホイミンの性格(登場シーンを除く)が少し崩壊していると思います。そのままだとスラリンとキャラがかぶるので・・・。

時には手を抜いてみましょう。

棺桶たちを倒した俺達はとりあえず次の階へ向かった。

「勇ましい戦士の像がたくさん置いてますね」

・・・何か違和感を感じる。何かがおかしい。

たくさんの像に紛れて何かおかしいやつが・・・。

「ねえ、さっきこの石像の目光ったよ！」

「何かありそうですね」

「僕はホイミン。今はホイミスライムなの。でも人間になるのが夢なんだ」

「うわあ、石像が動いたよー！」

「ねえ、人間の仲間になったら人間になれるかなあ・・・？」

「何なんですか？ この石像は！」

「そうだ！ 僕を仲間にしてよッ」

「み〜た〜な〜！」

「わ〜い！ ありがとう！」

・・・会話がごっちゃになってすごいことになってる。

『動く石像が現れた!』

・・・とりあえず俺も戦闘モードに。

なぜここにホイミンがいるんですか？

ホイミンはこんなところで一体何をしていたんですか？

『ホイミンが仲間になった!』

というか何もいってないのに勝手に仲間にならないで下さい。

なんで動く石像の一言で仲間になっちゃってるんですか!？

『動く石像を倒した!』

・・・あれ？ いつの間にか終わってる。

「次行こうよ」

・・・文字だけじゃスラリンとホイミンの違いが分からない。

そこにはお墓が2つ置いてあった。

「これ何？」

スラリンがお墓の前に立って言った。

「それはお墓っていうんだよ」

そしてホイミンが答える。

「何するところ？」

「中に入ってみれば分かると思うよ」

「じゃあ、中に入ってみるね。どうやって中に入るの？」

「僕が入れてあげるよ」

「わあ、中真つ暗だ」

・・・何してるんだ？　　というか墓に入る＆入れるな。　　なんと罰当たりなことを・・・。

「お化けの墓って書いてるよ」

なぜお化けの墓があるんですか！？　　お化けは墓に入らずにそのまま成仏してください。

「こんな小さいところに入れるのでしょうか？」

そこは問題じゃありません。

「こっちは親分ゴーストの墓って書いてるよ」

なぜボスの墓を作ってるんですか！？　　なんかもう死ぬ気満々じゃ

ないですか!!

「親分ゴーストってお化けの一番偉い人かな?」

「どうだろうね。將軍ゴーストとかいるかも知れないよ?」

「え!? そんなのもいるの?」

「上には上がいるからね」

・・・もう何も言いません。

↓次の部屋↓

窓のそばで女の人が立っている。

その女性に声をかけようとその窓に近づく。

『王妃は俺達を優しく見つめると そつと目を閉じた・・・』

そしてそこに現れたのは・・・

「ほほう・・・。ここまで来るとは大したガキどもだ」

『親分ゴーストが現れた!』

・・・何故!?

言葉より強いものではありません。

またいきなりですか！？ このゲーム（？）は本当にいきなりが好きですね。

というかあなたから勝手に来たのに褒められる筋合いはありませんが……。

【まあこのゲームは一章一章を早く終わらせたいんですから、いきなりや無理やりな展開がきてもしかたありませんね】

【それは俺が答えてやろう。まあでも今はめんどくさいから後でいいな】

ちょっと邪魔です。どうか行ってください。教える気がないなら尚更どっか行ってください。

というか会話が微妙に成り立っていません。

それにしても本当に無理やりな展開だ。一体何がしたいのか分からない。

突然現れた親分ゴーストを見てスラリンの眼がキラキラし始めた。

「わあゝ、この人きつと親分ゴーストだゝ」

そして親分ゴーストの足元でキラキラしている。

あんまり近づくと踏めますよ。あなたは踏まれやすいんですから。

「そうだとも。俺が親分ゴーストだ。そしてこの世界で一番偉いだ！」

「どこからあんな自信があふれだしてくるんでしょうか？」

「あれって自画自賛ってやつだね。上には上がいるって言葉を知らないのかな」

「全くですよ。あのような方には現実ってものを教えてあげたいですね」

それはどこかの親の会話ですか？

「へー、そうなんだ。じゃあ最強だ」

「それはないよ、スラリン。さっきも言ったけど上には上がいるんだよ」

「上には家がいるの？」

家がいて堪るか。そんなのがいたら即死じゃないか。

間違っても普通の人間ならリアルな縁の下の力持ちにはなれない。

というか一文字違いで偉いことになってるぞ。

「何を言っただ！俺が一番偉いに決まって・・・」

親分ゴーストが反論だ。

「それにこんな弱そうな奴が一番偉いわけないよ」

ガーン

「何を・・・」

「そっかゝ、そうだよな」

「そうだよ。魔法使いと同じような見た目のくせに、それより弱そうだよ」

「そういえばなんで魔法使いと一緒になのかな？」

「ん？なんでって？」

「だって親分ゴーストってお化けなんですよ？でも魔法使いは生きてるよ？」

「そういえばそうだね。死人と魔法使いが一緒っておかしいね」
おばけ

「実はこの人、お化けじゃなくて魔法使いなのかも」

「親分魔法使いって感じかな」

「・・・なんて・・・こと・・・だ」

ガクッ

『親分ゴーストに200のダメージ!』

『親分ゴーストを倒した!』

・
・
・何故?

小さな間違いで大きな間違いになることもあります。（前書き）

睡魔に襲われながら考えていたので少々適当気味です^^； 終わ
ったら爆睡したいと思います。

小さな間違いで大きな間違いになることもあります。

・・・何が起きたんですか？

『親分ゴーストを倒した！』

『300の経験地を獲得！』

『180ゴールドを手に入れた』

・・・まあいいや。とりあえず無傷で終わってよかった。

《たっ・・・助けてくれー！ このゲームの世界からは出て行くから！》

・・・どこに行く気ですか？

《あいつが出て行けばこんな何も無い城にはもう魔物もやってこないはず》

誰に罪を擦り付けようとしているんですか。

《俺達や魔界のはみ出し者でただ楽しく暮らせるところとこの世界が欲しかっただけなんだよ》

今すぐ帰って下さい。・・・こんなところにプチ魔王発見しました。

《許してくれるだろ？ なッ なッ？》

世界征服を企む奴を許すことは難しいと思います。

「嫌」

「ダメ」

「許しません」

予想通りの返答ですね。

《そんなこといわずに頼むよ坊っちゃん！》

出ましたよ。永遠に終わらないセリフが。

「嫌」

「ダメなものはダメだよ」

「反省するまで許しません」

《そんなこといわずに頼むよ坊っちゃん！》

・・・原作通りなのはいいですけどどうとおしいですね。

「嫌。というかそのセリフさっきと同じなんだけど」

あなたも人のこと言えませんよ。

「ダメ人間になっちゃうよ」

微妙にズレてきましたね。

「しつこいですね。なんと言われても許しませんよ」

さて、いつまで続ける気でしょうか。

《へっへっへ。ありがたい。あんた立派な大人になるぜ・・・》

あれ？ 勝手に逃亡です。まあどうせ永遠に続けても同じなんだろうでもいいですけど。

ゴーストが消えた代わりに王妃と王が出てきた。

そして俺達を上へ連れて行く。

《よくぞやってくれた！ 足から礼を言うぞ》

そんなところから礼を言われても嬉しくありません。

「失礼ですが誰でしょうか？」

ほら見て下さい。いきなりボスを出現させるからこついうことになるんですよ。

「本当にありがとう。あなた達のおかげで爆睡できそうです」

おなたは本当に王妃様ですか？

「おばさん誰？」

こいつに至っては王妃すら知らないじゃないですか。

というかさつき王妃が一瞬何かに反応しましたよ。

たぶん次おばさんと言ったら地獄行きですね。

「じょうしやあんみん
城者安眠」

そんな四字熟語存在しません。何勝手に作ってるんですか。

というか王妃様怒ってますか？

「どういう意味？」

・・・そうなりますよね。

「さあいこうか、お前」

「はい、あなた・・・」

無理やり《ジ・エンド》です。

「さようなら。あなたたちのことは早く記憶から抹消します・・・」

王妃様絶対怒ってますよ？ どうするんですか。

そして2人は消えていった。

「よかったですね。誰かは知りませんが2人幸せに眠り続けるはずですよ」

「ねえ、そういえば君誰？」

「あれ、なんでしょう？　きれいな宝石が降ってきましたよ」

「僕？　ずっといたのに気付かなかったの？　それはないよね？」

「きつとお礼ですね。持って行きましょう」

「・・・酷いなあ。僕もう知らないよ」

また会話が妙にシンクロ率が高い気がする。

まあ、後ろは置いて・・・

オーブは持っていつていいんでしょうか？　あとで真・主人公が困るのでは？

『キイトは金色に光るオーブを拾って俺に手渡した』

『俺はゴールドオーブを手に入れた！』

まあ、貰える物は貰っておきましょう。

・・・どうせあとで壊されるんですから。

小さな間違いで大きな間違いになることもあります。（後書き）

キャラ紹介PART4！

『ホイミン』

本名（？）：保李明（適当ですw） 職業：魔物

年齢：不詳（人間にするとたぶん14歳くらい）

血液型：不明（人間ならたぶんB型）

@詳細@

基本的にスラリンと同じですが、ホイミンの方が少しクールです。こちらはもとも4のキャラなので今は人間にはなれません。どうして話せるのかは、少なからず5の影響（マーサの力）を受けていると考えて下さい。

@一言@

普通に出すとスラリンとキャラが被ってしまうので、キャラが崩壊しない程度に違いをつけてみました。既に崩壊したらスイマセン。そのときはいつそのこと別人と考えて下さい。ていうか、スラリンとホイミンの登場が逆の方がよかったような気がします。

ちよこつと番外編／その後の（真）主人公

アベル達が辿り着いたとき、そこに誰もいなかった。

「あら？ 誰かが退治しちゃったのかしら？」

「困ったわね。私たちがお化け退治しなきゃあの猫さんは助からないじゃない」

「・・・じゃあ、僕達が退治したことにしたらいんじゃない？」

「それいいわね！」

『レヌール城のお化けを退治したという噂はその夜のうちに広まった』

『そして夜が明けた・・・』

「さあ 約束だわよ！ その子猫もらっていてもいいわね？」

「おい どうする？」

「しかたないか・・・」

「よし！ 約束したからな。 この猫はあげるよ！」

「よかったわね猫さん。 もういじめられないわよ」

「さあ行きましょう」

「そうだわ！」

「この猫さんに名前をつけてあげなきゃ！」

「じゃあ・・・アンドレってどうかしら？」

「それでいいんじゃない？」

「わかったわ　アンドレね！　本当にこれでいい？」

「しつこいなあ。それでいいって言ってるだろ？」

「決まったわね！　今日からあなたはアンドレよ！」

「・・・それにしても本当にするとは思わなかったよ」

「何か言った？」

「別に・・・」

ちよこつと番外編／その後の（真）主人公（後書き）

ちよこつとトーク

ア「・・・これっていいのか？」

ス「でもビアンカちゃんはずっと猫を助けられて嬉しかったと思うよ？」

ア「まあ嬉しかったのは分かるが・・・」

キ「猫を助けるためにお化け達を退治するなんていい子達じゃないですか！！」

ア「退治したの俺達なんだけど！！」

ホ「正確には僕とスラリンだよ」

キ「あれ？そうなんですか？勝手に倒れたのでよく分かりませんでした」

ア「まあな・・・」

ス「でも何もしてないのに倒れるなんて変な人だったね」

キ「それにしてもビアンカちゃんは勇気がありますね」

ホ「あれは精神攻撃っていうんだよ」

ス「精神攻撃って何？」

キ「誰かさんとは違って」

ホ「さあなんだろうね？自分で調べてみたら？」

ス「教えてくれないの？」

ア「・・・悪かったな」

ホ「人の存在を忘れていた人には教えないよ」

ア「というかこの流れライアンのときと一緒にやねえか！」

キ「最初ら辺なんて内容もそんな変わってませんね」

ホ「次も見えてね」

続

『アラン』

LV:9 HP:75 MP:40

力:35 素早さ:30 身の守り:10 賢さ:10 運の良さ:

2

攻撃力:180(剣なし:45) 守備力:70(兜なし:30)

《覚えている呪文》

ルーラ・リレミト・トラマナ・ラナルータ・トヘロス・インパス

『スラリン』

LV:8 HP:70 MP:25

力:31 素早さ:20 身の守り:15 賢さ:5 運の良さ:5

攻撃力:45 守備力:30

《覚えている呪文》

ニフラム・メラ、メラミ・ギラ、ベギラマ

『キイト』

LV:10 HP:40 MP:200

力:27 素早さ:35 身の守り:20 賢さ:60 運の良さ:

10

攻撃力:50 守備力:35

《覚えている呪文》

スカラ、スクルト・ピオリム・バイキルト・マホステ(4のみ)・マホキテ(5のみ)・マホカント・フバーハ・ラリホー、ラリホー・メダパニ・マヌーサ・ルカニ、ルカナン・ボミオス・マホトー

ン・マホトラ

『ホイミン』

LV:9 HP:65 MP:70

力:34 素早さ:25 身の守り:13 賢さ:9 運の良さ:4

攻撃力:40 防御力:35

覚えている呪文

キアリー・キアリク・ザメハ(4のみ)・ザオラル、ザオリク・シ
ヤナク(5のみ)

スライムなのにメラやギラを覚えているやホイミスライムなのに
ホイミが使えない事に関してはあまり触れないで下さい。

堂々としてると案外ばれないんです。（前書き）

『三章』サントムハイム城の魔物退治』スタートです。いきなりサントムハイム城から始まります。というかボスが出てくる順番がおかしくなってます。果たして倒せるのでしょうか？たぶん無茶苦茶しますよwあと、なんか欠けてる気がします。

堂々としてると案外ばれないんです。

・・・なんですか、この光景は。

強そうな魔物たちがズラズラと城の中に入っていく。

もちろん草陰に隠れてますよ。堂々と立っていられる訳ないじゃないですか。

というかここは何処でしょうか？

「急げ、急げ！」

「早くしないとバルザック様に怒られるぞ」

・・・っ！？ さっきなんて言いましたか？

「え〜と・・・、どうしますか？」

「とりあえず様子を見たい。というか関わりたくない」

「珍しく同意見です」

珍しくってどういう意味だよー！！

「あの人達何してるのかな？」

「じゃあ、聞いてこようか？」

「え！？ 本気ですか？」

「大丈夫だよ。これでも魔物だからね」

「そっか。じゃあ、僕聞いてくるね」

「一人で大丈夫でしょうか？」

「いろんな意味で心配だ。」

「ホイミン、お前も一緒に行ってこい」

「嫌だよ。何で僕が一緒に行かなきゃならないの？」

あの時からホイミンがスラリンに対して冷たいです。

そんなことしてる内にスラリンが向こうに行ってしまった。

「ねえねえ、何してるの？」

「なんだ、お前は？」

「僕はスラリン。スライムだよ」

「ここに何か用か？」

「ここで何してるの？」

質問を質問で返してどうするんですか？

「この城を占領するんだ」

さらっとすごいと言いましたね。

「ふん。そうなんだ。頑張ってね」

応援してどうするんですか？

「・・・なんなんだ、お前は」

魔物はそういった後、いそいで城の中に入っていった。

・・・正直、相手が急いでて良かったです。

そしてスラリンが堂々と帰ってきた。　バレたらどうするんですか！？

「ねえ、占領って何？」

「・・・泥棒と似たような感じだよ」

不機嫌でも答えるんですね。

「それって悪いこと・・・だよな？」

「・・・うん。悪いことだよ」

「じゃあ、懲らしめなきゃ！」

「・・・そうですね。正直関わりたくないですが、野放しには出来

「ませんよね」

「俺は行かないぞ」

「相変わらず臆病ですね」

今回はなんと行われても行く気はない。相手が悪すぎる。

「僕もパス」

「ホイミンさんまでっ!？」

「なんで？」

「君達バルザックって知らないの？」

「バルザック？」

「今の僕らには強すぎる奴だよ。正直今のレベルじゃ負けちゃうね」

何処の世界にLv10以下の仲間パーティーでバルザックに挑む奴がいるんですか!？」

せめて後12〜3Lv欲しいです

「でも悪い奴はやっつけなきゃ」

「なあ、今思ってたんだが俺らって死んだらどうなるんだ?」

「そつえば気になりますね」

「ゲームみたいに生き返ればいいんだが・・・」

「もし・・・」

俺はわざと怖い顔をして言う。　　「というか実際に考えると怖い。」

「そう考えると行く気がなくなりました」

案外物分りいいじゃないですか。

「でもっ・・・!」

スラリンはきつと正義の塊です。

「・・・じゃあダメもとで行ってみる？」

・・・え!?

堂々としてると案外ばれないんです。（後書き）

（することないので）前に呪いと悪魔が言っていた事についての解説をしたいと思います。

【まあこのゲームは一章一章を早く終わらせたいんですから、いきなりや無理やりな展開がきてもしかたありませんね】

【それは俺が答えてやろう。まあでも今はめんどくさいから後でいいな】

この部分です

とりあえずこれをご覧下さい。

序章全9話→冒険のはじまり→

（圏外）

一章全3話→イムルの村の子供達→

（設定話数3話）

二章全5話→レヌール城のお化け退治→

（設定話数4話）

設定話数に収めようとした結果が今までの無理やり&いきなりな話です。でも早くも設定が狂ったのもう自由にやります。

ちなみに二章のなんとか設定話数に収めようと出た案が棺桶の中からゴースト親分や動く石像の正体がゴースト親分になったりしてました。

以上ですw

恩返しは大切です。(前書き)

イメージ崩壊注意報(今さらですが)！？

新たな仲間乱入！？

意外な特技！？

おまけ付き！？

(・・・？)

恩返しは大切ですよ。

・・・正直ダメもとでは行きたくない。

「どういつこと〜？」

「そのままの意味だよ」

「死んだらどうなるんだ？」

「ザオリク使えるんじゃない？」

「もし使えなかったら・・・？」

「うーん。実験してみる？」

ホイミンは少し考えてから何かを見つけて言った。

「ちょうどあそこに何か倒れてるし・・・」

え！？　なんで！？

なんでそんないいタイミングで倒れてるんですか！？

「・・・俺は・・・もう・・・ダメだ」

何があっただんですか！？

「もういいよ！いいから何も喋らないで！！」

・・・？

「誰か・・・俺の・・・分・・・まで・・・幸・・・せ・・・に・・・なれ・・・よ・・・」

「そんなこと言わないでよ！誰かと一緒に幸せになるって約束したよね？約束破るなんてひどいよ！」

「ごめ・・・ん・・・な・・・誰・・・か・・・」

ガクッ

「誰かあああああ！！」

・・・もういいですよ。

あと誰か誰かをそんなに連呼しないで下さい。

というかお互い知らない人なのによくここまでできましたね。

「・・・何この茶番劇」

「・・・劇ではないですけどね」

「・・・まあ、いいや。とにかく実験しないと・・・」

『ホイミンはザオリクを唱えた！』

「なあ、これでもし生き返らなかったらどうすればいいんだ？」

これで生き返らなかったら笑い事じゃすまないよな……。

「お城の魔物退治は諦めるしかありませんね」

……え？ そっちの方が大事なの??

こいつは放置でいいのか？

『誰かが生き返った!』

あ、生き返った。

「あれ？ 生き返った……？」

「誰かわかんねえけど助けてくれてありがとうな！」

「いや、別にそんなつもりじゃないんだけど……」

「なんだよツンデレか？」

ホイミンは本気でお前を助ける気なんてなかったと思うぞ。

「知ってる？ 死んだ人が生き返ったらゾンビになるんだよ？」

なんでそんな知識だけ持つてるんだろ？ そしてなんで疑問系なんだよ。

「お前スラリンか!？」

どうやら知り合いらしい。というかさっき合った時点で気が付かなかったのか？

「なんで僕の名前知ってるの?。」

「久しぶりだな! 元気にしてたか?」

「君誰?」

「俺のこと忘れたのか!? 俺だよ俺!」

「もしかしてお隣の古多老さん（いすのろうさん）? 古いが多い老人で有名な」

古多老さんって誰ですか!?

しかも『古いが多い老人』って直訳すると『かなり老けてる老人』って意味じゃないですか!!

「そうそう古多老さん・・・って違うわ!! 誰だよ古多老さんって!」

「え? 知らないの? 結構有名神だよ」

なんですか有名神って! 人じゃないんですか!

「じゃあ・・・ブルツピ? いや、アキーラかな?」

「俺はスラボウだ!!」

「あ！　そういえばそんなのいたね」

可哀そうじゃないですか。

「それは本気で言ってるのか？」

「スラリンの頭の中って一体どうなってるんだろね」

・・・同感です。

「そういえばこんなところで何してるの？」

「迷子になった」

「そうなんだ。お疲れ」

お疲れって何ですか！？

「ここはどこだ？」

「うーん。そういえばここ何処？」

「お前も迷子じゃないのか！？」

ある意味な・・・。

「ここはサントムハイム城だよ。ちょっと前は人がたくさんいたんだけど・・・」

「今は魔物が住み着いてるよ」

正確にはさっき占領されたばかりだけどな。

「そうなのか！　だからお前らはここを魔物の手から取り戻そうと・
・！？」

「うん！悪い奴らは倒さないと！」

「いや、そういうつもりじゃないけど・・・」

「よし！　助けてくれた恩を返したい。　俺を仲間にしてくれ！」

会話が微妙に合ってません。

「いや、僕に言われても・・・」

「いいよ。一緒に倒そうよ」

何勝手に決めてるんですか！？

『スラボウが仲間になった！』

・・・このままいくと勝手に知らない仲間がたくさんいそうですね。

恩返しは大切ですよ。（後書き）

おまけ物語　　性格^{キャラ}について？
やりたい放題やりました。

ア「お前のキャラって仲間になる前とかなり雰囲気違うよな」
ホ「そう？　まあ、自分でも思ってるけど」
キ「ていうか仲間になった瞬間から雰囲気変わりましたよね？」
ホ「そうだね。ああいうのは最初が肝心だからね。一応シナリオどおりに言ってみただけど」
キ「ちなみに今あのセリフを言ったらどうなります？」
ホ「こんな感じかな」

こんな感じ←

「僕はホイミン。今はホイミスライムなの。でも人間になるのが夢なんだ」

「僕はホイミン。見た目どおりホイミスライムだよ。でも将来人間になりたいんだ」

「ねえ、人間の仲間になったら人間になれるかなあ・・・？」

「ねえ、人間の仲間になったら人間になれると思う？」

「そうだ！　僕を仲間にしてよッ」

「実験してみようよ。ということで僕を仲間にしてよ」

「わーい！　ありがとう！」

「そう言ってくれると思った」

@どっちの方がいいですか？

キ「かなり変わりましたね」

ア「予想以上だな」

ホ「最初の頃はどうかしてたんだよ。それは僕じゃないって思ってたいいよ」

ス「そう思ってた欲しいんじゃないのか!？」

ボ「・・・君って鋭いんだね」

ス「否定しないんだな!？」

ホ「否定したところで余計怪しまれるだけだし」

ア「お前はお前でスライムのイメージが崩壊してるよな」

ス「ほつとけ!！」

ア「あと一言いいか?『ス』だとスラリンとごっちゃになるぞ?」

キ「まあ性格も話し方もほとんど正反対ですから分かるのは分かりますけど・・・」

ホ「パツと見じゃ分からないよね」

ス「一気に言うな! 頭が混乱するだろ!？」

次回予告

消えたスラリンの行方 「そういえばさつきからいませんね?」

深まる性格の雑談 ^{キャラ}「深まらなくていいんじゃない?」

襲い掛かる眠気 「それは知らないよ。というか次回予告なの?」
そして暴走する『やってみた』 「・・・おい」

続

やってみた←

「僕はスラリン。悪いスライムじゃないよ。強いスライムになりた
いんだ」

「俺はスラボウ。決して悪いスライムじゃない!もっと強くなるの
が俺の夢だ!」

「ねえ、いいことたくさんしたら強いスライムになれるかな？」

「なあ、その前にお前らに恩を返したい！」

「そうだ！ボクを仲間にしてよ」

「だから俺を仲間にしろ」

「ありがとう！ボク一生懸命頑張るね！」

「絶対この恩は返すからな！」

たまには違う道を行ってみましょう。
(前書き)

違う道〓非道〓チートという解釈でw
これからもっと酷くなりますよ。

たまには違う道を行ってみましょう。

行く気満々の2匹とよく分らない1匹と行く気がない2人。

「悪い奴らを倒しに行こう」

「この俺の手にかかればどんな奴でも一撃だぜ！」

「全力で僕を守ってね」

・・・一人だけおかしい奴がいるのは気ですか？

「皆さん、本当に行く気ですか？」

「安心しろ！ここでは何だか物凄い技が使えるそうなんだ！」

スイマセンが安心できません。

「じゃあボクも」

じゃあってなんですか。

「じゃあその技で僕を守ってね」

『バルザックが現れた！』

いきなりですか！？　せめて前置きを下さいよー！

というか何処から出てきたんですか！？

それとセリフカットですか！？ 何か言っして下さいよ！！

「先に言っとくけど僕、回復出来ないから」
ホイミ

「なんでホイミスライムのくせに回復出来ないんだよ！」

「回復出来なかったらただのスライムといっしょだよ」

「僕をスラリンと一緒にしないでよ」

「ちなみにスラボウさんもスライムですよ」

「ごちゃごちゃうるせえよ！」

それは敵のセリフですよ！？

「とつとと片付けるぞ！ スラリンお前の力を見せてみる！」

「えゝ？僕のゝ？」

『スラリンはベギラマを唱えた！』

何で使えるんですか！？

『バルザックに30のダメージを与えた！』

「所詮そんなもんか！ 思い知れ、俺の力を！！」

だからそれ敵のセリフですって！！

『スラボウはバギクロスを唱えた!』

だから何で使えるんですか!?

『バルザックに70のダメージを与えた!』

「じゃあ僕は・・・」

『ホイミンは身を構えている!』

何で防御なんですか!?

「死にたくないからね。というか一人オーバーしてるよ。誰か抜けないと・・・」

ちやつかり俺の心の中の質問つっこみに答えしないで下さい。

あなたは読心術でも使えるんですか?

「いいんじゃないでしょうか? 向こうもボスの順番無視してますし・・・」

「それもそうだね。目には目をつてやつだね」

「いたそうだね」

「・・・」

そっちの意味じゃありません。

「ところで僕はどうしよう?。」

「その奴! ピオラ使えるか!? 使えるならスラリンに使ってくれ!。」

「え? はい、分かりました」

ピオラはここでは使えませんか!?

『キイトはピオラを唱えた!』

『スラリンは2回攻撃が出来るようになった!』

何故ですか!? しかもピオラ使えるんですね!?

「まるでチートだね」

・・・いや、チート以上です。

自分達だけで盛り上がってはいけません。（前書き）

・・・遅くなつてすいません。いろいろありましたが言い訳はしません。え？ 言い訳することすらないんじゃないかって？ そ、そんなことないですよ？ ほ、本当ですって！！・・・多分。 ていうか私、これでも受験生ですからね！？ そのところを分かつて欲しいものですよ。 え、受験生なら真面目に勉強しやがれ？・・・ええ、そんなこといわれてもなあ・・・。 まあ勉強も遊びも両立して頑張ります！！ それは両立してはいけません。

自分達だけで盛り上がってはいけません。

・・・正直もうやる気しないです。 ↑テンション：10

【アランはやる気がなくなった】

「スラリン！」 ↑テンション：120

【スラボウはスラリンに話しかけた】

「なあに？」 ↑テンション：50

「今こそ自分の力を出し切るときだ！」

「自分の力？」 よく分からないけどやってみる」

ベチョーン

ぎゃああああ！！ ↑テンション：45

【スラリンは潰れた！】

・・・つ、潰れた。・・・ある意味ホラーですね。

「うわぁ！ 何やってんだお前！」

【スラボウは突っ込んだ】

・・・どうやらこいつにも想定外だったそうです。

「こしゃくな真似をつ！まずはお前から消してやる！！」 ↑テンション：80

・・・敵さんを挑発してますよ。 ↑テンション：20

【アランは心の中で忠告した】

『バルザックの攻撃！』

『ミス！ スラリンは潰れていてダメージを受けない！』

・・・これは何というか・・・。

あれ？ というか俺の順番は？^{ターン}？

【アランは忘れられた】

うるせえよ！ さつきから何なんだよ、これ！！ ↑テンション：45

「まあ結果オーライだ！お前なら出来ると思ってたぜ、パ○ディンガード！」

元々するつもりだったんですか！？ それはここでは使っ
てはいけませんよ！！

「・・・これ何のゲームなの？」 ↑テンション：10

・・・俺も同感です。 ↑テンション：35

【ゲームの概要が分からなくなった】

「よし、スラリン！アレをやるぞ！」

【スラボウは何かを提案した】

「アレって何？」

「いくぜ！！」

【スラボウはスラリンを引っ張った】

「スラ・ストライク！！」

【そして放した】

えええええ！！ そんな技ありですか！？

・・・というかあなたが提案したのにあなたはしないんですね。

【スラボウは仲間を使って攻撃をした】

『バルザックに300のダメージを与えた！』

ダメージ与えすぎです！ 今までの攻撃と桁違いじゃないですか！！

「こしゃくな真似をつ！まずはお前から消してやる！！」

・・・そのセリフ2回目です。

【バルザックは頭がおかしくなった】

『バルダックの攻撃！』

バルダック！？ いきなりアヒル化ですか！？

【システムもおかしくなった】

・・・ていうか、もう順番がグダグダです。

「こい！ 俺に敵うと思うな・・・」

『スラボウは100のダメージを受けた！』

・・・あ。

『スラボウは力尽きた！』

・・・あなたは一体何がしたいんですか？

「・・・油断した・・・まさか・・・ここまで・・・力があつた・・・とは」

「今は劇やらないよ」

「ゲフッ」

なぜダメージを受けてるんですか！？

「・・・だが・・・世界は・・・必ず・・・私の・・・物・・・に・・・」

ガクッ

「・・・これ生き返さないといけないの？」 ↑テンション：5

「・・・可哀そうですし行き返してあげましょうよ」 ↑テンション：30

「・・・こんなのでいいのでしょうか。」

自分達だけで盛り上がってはいけません。（後書き）

テンションゲージ付けてみました。略してTGです。主人公のテンションはコロコロ変わります。バカ2匹は基本的には変わりません。ホイミンは低い値で変わります。キイトは・・・普通です。ちなみに私のテンションは睡魔の影響により左右されます。

では次回いつになるか分かりませんが、次回も暇なら見てくださ
い。

貸しは溜めすぎるとよくないですよ（前書き）

毎度毎度スイマセン。

今回は完全に睡魔に負けました。もう途中から何を書いているのか分からなくなりました。しかも話がかなりグダグダ+どうでもいい感出てます。

え？睡魔の所為じゃない？じゃあ一体何が……。え？あゝ、お前の才能がないからと？

はっはっはゝ。そんなこと……。分かってますよ。どうせ私には才能なんてないんですよ。……

あゝ、なんか自分で言ってる悲しくなるからこの話終わり！もう触れないで、そこだけは！！

貸しは溜めすぎるとよくないですよ

なんかもう帰りたいんだけど・・・。

『ホイミンはザオリクを唱えた!』

『なんとスラボウが生き返った!』

「おお！ 何でか分からないけど生き返・・・」

「貸し1」

往き返すたびに貸しつくられたらむやみに死ねなくなるじゃないですか。

まあ、死ぬ気はないけどね。・・・だって痛そうだし。

（あえてそことスラボウには触れないで）というかこんなホイミスライムどこ探してもいないよ。

「貸しってどういうこと・・・」

「はい、まだ敵いるよ。とっとと倒してきてね」

戦闘参加する気0ですね。俺も人の事いえないけど・・・。

「まってってね、スラボウ。僕が君の仇討つからね」

スラボウ生きてますよ。確かに1回死んだけど・・・。

というかそんな笑顔で言われても・・・。

「スラボウさん、向こうでも元気でいてくださいね」

いや、だからスラボウ生きてるから。

「あと、兄さんよろしく伝えといて下さい」

え、何？ 俺も死んだことになってるの？

「くらくらえ〜。スラボウの仇〜」

仇討つ気0ですね。何ですか？そののんびりした声は・・・。

『改心の一撃!!』

ええええ……。そんなのんびりした動作で出ちゃうものなんですか、会心の……。

つて、ちょっと待ってください。何ですか、その技は!?

「ぐはあああつ……。!?!」

うわあ〜、喰らっちゃうんですか……。

『アクバットに100のダメージを与えた!!』

アクバットってもう文字が1つも合っていないじゃないですか!?

バルダックから一体何があったらそうなるんですか!!

「私は一体何をしていたんだっ……」

あれ？ まさかの記憶喪失ですか？ もしかして改心しちゃいましたか？

「酷い女癖で浮気はもちろん、ナンパやセクハラばかりしていたよ」

勝手に過去を変えないであげて下さい。

「なんと私はそんな酷いことを……。私はこれからどうすればいいのだっ……」

ほんとに効いたんですね、改心の一撃。

「これから宇宙の平和を守ってみろ!!」

うわぁ……。宇宙規模になっちゃいましたよ。

「宇宙のヒーローか。だが具体的に何をすればいいんだ？」

「星の数を数えていたらいいんじゃないでしょうか？」

すごく地味な宇宙のヒーローですね。というかそんなの一生終わらねえよ。

「というか私は誰だ!!」

今更ですか！？ 普通は一番最初に言うセリフですよ！？

「ナンパックとかその辺じゃなかったけ」

うわっ！！・・・凄く適当ですね。

「では皆ありがとう。私は宇宙に行ってくる」

こいつの将来が物凄く不安なんですが・・・。

貸しは溜めすぎるとよくないですよ（後書き）

宇宙のヒーローナンパック

普段は無類の女好き！どんな女の子にも手を出すぞ

でもいざ地球にピンチが訪れたら大活躍！物凄い速さで星の数を数えるぞ

どんな強敵でもくじけない！叩かれても殴られても諦めないぞ

いつもみんなの人気者！警察にはいつも噂が絶えないぞ

頑張れ！僕らのナンパック

その後のナンパック（前書き）

なんでこんなものやっちゃたんですかね？

その後のナンパック

私の名前はナンパック。好きなものは女の子。ロリから熟女なんでもokだ。

以前はもっとかっこいい名前だったような気がするが、以前はとてつもなく悪い奴だったそうだ。

そうだというのは私には以前の記憶がないのだ。

ある方たちによって改心させられたときに、前に戻らないようにと暗示をかけてくれた。

さてそんな私だが、今は宇宙の平和を守っている。

私を作り上げられた宇宙要塞『回収マシン』に乗ってな。

「キヤー、大変だわー。宇宙に巨大な隕石が現れたわー」

おっと、のん気に話している場合ではないな。

「お嬢さん、キレイですね。僕と一緒にお茶でもしませんか?」

「今はそれどころじゃないわー。あの隕石をどうにかしなきゃー」

さっそく危険が来たようだ。どれ、私の力を見せてあげよう。

「必数!! 数え!!!!」

この技は私の目の前にある星をとてつもない速さで数える技だ。

これでどんな敵もいちころだ。

「キヤー、すごいわー。こんな勢いで星が数えられるなんてー」

ふふ、どうだ。女の子もメロメロ・・・。

「でもそんなことしたって隕石は消えないわー」

ドッカアアン・・・。

頑張れ僕らの宇宙ヒーロー、ナンパックー!!

人の命は大切にしましょう。（前書き）

皆さん久しぶりです。

というかお待たせしてスイマセン。

とりあえず何とか例の件が終わりましたので
コツコツ投稿していきたいと思います。

そして今回からラインハット突入です。

人の命は大切にしましょう。

もう疲れた……。いつまで歩けば次の街に着くんだ……。

【もうすぐですよ。頑張つて下さい】

うお！ 久しぶりだな、呪い。

<ただいま帰りましたデス>

誰だお前！？

<世界一周旅行疲れたデス>

今さら帰ってきたの、天使！？

てか今までいなかったの！？ そんなの俺がすごい悪い子みたいになってたじゃん！

【お疲れ様です。どうでしたか？】

<地球は青かったデス>

それ、世界一周旅行してきた感想じゃないよね！？

明らか宇宙行ってるよね！？

「旅人さ〜ん。見て〜、街が見えたよ〜」

スラリンが俺の足元をクルクル回りながら言う。

前に進めないんだが・・・。

「街というか城だね」

「とりあえずもうクタクタです。宿屋で一服していきましょう」

<賛成デスー。僕もクタクタデスー>

お前は参加すんじゃないか？ てか、自分から行ったんでしょ？

とりあえず今日は宿屋に泊まることにした。

『タラララッタッタ』

少なくて！？ 睡眠時間この曲が流れている間だけかよ！？

というか歌ってんだけど！？ ナレーターが自ら歌ってるよ！？

「そんなこんなで次の日」

「おい！モタモタしてねえで早く王子をイカダへ！」

「へいつ！」

宿屋からでた瞬間に声がした。誰だ、朝からうるさいヤツは！？

俺はなんでか知らないけど寝不足なんだぞ。

というか、ここラインハットじゃん!? ヘンリーGOODタイミングで誘拐されてるなあゝ・・・。

とりあえず、なんか寝不足だからもう一回寝よ。・・・お金要るけど。

別に行きたくないわけじゃなくて、ただ単に眠ただけだからな!?

「兄さん! 子供が誘拐されてますよ!?!」

「うおおおお!! 待ちやがれ!!」

スラボウがヘンリーを誘拐したおっさん達について街の外へ行ってしまった。

「旅人さん! パパスさんが死んじゃうよ!!」

はゝい、ネタバレ禁止。

「あと、このまま行くとスラボウも死んじゃうね」

「スラボウさんはいいとして、なんとしてもあの男の子を助けてあげましょう!」

え? スラボウはいいんですか?

まあ、死んでも行き返せますけど・・・。

人の命は大切にしましょう。（後書き）

スラボウのキャラ紹介を忘れていたorz
ということ・・・。

キャラ紹介PART5！

『スラボウ』

本名（？）：スライム 職業：魔物

年齢：不詳（人間にするとたぶん12歳ぐらい）

血液型：不明（人間ならたぶんO型）

@詳細@

正義感が強い。熱血キャラ。すぐに突っ走る。

考えることが苦手で、後先のことを考えずに行動することが多い。
スラリンと同じようにこの世界の誰かの不思議な力によって
人の言葉が話せるようになったり、人の姿になることが出来る。

@一言@

なんとなく熱血キャラを入れてみたかったのと、

スラリン＆ホイミンと逆の性格にしたかったのでこんなキャラに・・・。

というか、パーティの魔物がスライム系しかない。

この後の展開について

皆さんお気づきかもしれませんが、この話このまま行くとすっごい
シリアスな場面とぶつかってしまいます。一応シリアス回避出来る
準備は出来てますが、私にはあんな重たい話を台無しにする勇氣は
ありません。私は一体どうすればいいのですか！！というかどっち
をご期待してますか？

シリアスvsギャグ 誰か票入れてください!!

『最終手段 - どっちもやる』

たまには逃げることも大切ですよ。（前書き）

最初のほうと比べて思ったこと、主人公が真面目になつとるがな！？
まあ、周りがボケばかりだからしかたないけどさあ・・・。
ということであつて戻していいこうと思います。

そして今回すつごく雑になりました。申し訳ございません。
もう少し力を入れて頑張りたいと思います。

たまには逃げることも大切ですよ。

わあゝ、何こゝ？ 広ゝい！ 暗ゝい！ 迷路みたゝい！

みんな迷っちゃうかも知れなゝい！

てことで帰ろう？ 今すぐダッシュで帰ろうよ？

え、何？ 別に怖い、行きたくないとか思っていないよ！？

ただ、みんな迷ったらいけないからだよ！？

「なんだか不気味な雰囲気がしますね」

だよね！ 帰ろうよ！！ なんて行くの！？

「それにすごい魔力を感じるよ」

だから帰ろうよ！！ 今ならまだ間に合うよ！！

「ナンパックが帰ってきたのかな？」

もうその人の事は忘れなさい。

『なんとパパスが魔物達と戦っている！！』

いきなりなんだよ！？ びっくりするじゃないか！！

てかまだ入り口だよ！？ パパスなんて何処にもいねえよ！！

「パパスさんが戦ってるよー！ 早く行こうよー！！」

次のフロアにてパパスと主人公を発見。

とりあえず今にも飛び降りそうなスラリンを抑えて、俺らは上から観戦だ。

主人公と出会うと厄介なことになりそうだ。

下手すりゃ主人公交代にするかもしれない。

それだけは嫌だ！

なんてったって主人公の特権がなくなってしまう（主人公の特権は物語の途中では絶対に死なない）。

『スライムナイトがあらわれた！ ドラキーがあらわれた！ まほうつかいがあらわれた！ スライムがあらわれた！』

なんか増えとるがな！？ というか違和感ありすぎだろ！？

『魔物の群れをやっつけた！』

そして倒されとるがな！？ あれスラボウじゃないのか！？

「さすがパパスさんだ〜」

あなたにはスラボウは見えないのですか。都合のいい目ですね。

「おお！アベルか！」

「お城ではぐれてしまったと思ったがこんな所までやって来るとは・
・・・・。」

「いや、父さんが勝手に・・・」

俺も同じようなことを考えたことがある。

「お前もずいぶん成長したものだな。父さんは嬉しいぞ！」

「さてともかく王子を助け出さねば！」

「お前が先に行け。後ろの守りは父さんが引き受けたぞ！」

「・・・・・。」

主人公がめっちゃ嫌そうな顔してるんですが・・・。

というか相変わらずやる気のない主人公ですね。

「僕たちも先へ進みましょう」

さて、どうなるんでしょう。

たまには逃げることも大切ですよ。（後書き）

次回！！ 真面目or不真面目！！

とりあえず両方します。

どっちかだけご覧下さい。

どっちも見てもいいですが・・・。

べ、別に嬉しいなんて思っていないからね／＼／

・・・すいません、自重します。

たまには真面目に生きましょう。（前書き）

真面目バージョン

珍しく真面目にやった結果がこれだよ！！

前半はいつも通り、後半からなんだこれ！？

相変わらず出来の悪い作品になっております。

そしてうちの主人公が解説役化してます。

というか主人公が交代しとるかな！？

ということでこれ番外編にする！！

主会話メインです。

たまには真面目に生きましょう。

一応道は覚えているから迷わずにはいけたものの、

気付いたらスラリンが消えていたり、

突然棺桶が現れたり（回収したけど）、

おぼれたり、

天空の盾を手に入れたり、

いろいろあつたけどなんとか目的地へたどり着くことが出来た。

現在のパーティは俺一人。

スラリン・・・行方不明

スラボウ・・・棺桶化

ホイミン・・・棺桶（邪魔だから）運び

キイト・・・スラリン探し

多分、下2人は何かを察して逃げたんだろう。くそっ、なんて人任せなパーティなんだ。

「へ　ヘンリー王子！」

突然そんな声が聞こえてきた。

とりあえずバレないように向こう側に泳いでいく。

入り口のところにいたら見つかってしまう。

「く！鍵がかかっている！」

「ぬっ！ぬおおおおーっ！」

パパスが鉄格子を壊すしてヘンリーのところに向かう。

とりあえず俺は見物だ。それしか出来ないだろう。

「ヘンリー王子！」

「ふん！ずいぶんと助けに来るのが遅かったじゃないか。」

「まあ いいや。どうせ俺はお城に戻るつもりはないからな。」

「王位は弟が継ぐ。俺はいないほうがいいんだ。」

「王子！」

パンッ

パパスがヘンリーを叩いた音が響く。

「な 殴ったな俺をつっ！」

「王子！あなたは父上のお気持ちを考えたことがあるのか！？」

「父上は 父上は・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・まあともかくお城に帰ってからゆつくり父親と話されるがいい。」

「さあ ヘンリー王子！ 追っ手の来ないうちにここを！」

パパス達が檻から出てくる。

その瞬間、まほうつかいが3体が行く手を邪魔する。

「く！さっそく現れたかつ！？」

「アベル！ ここは父さんが引き受けた！」

「お前は王子を連れて早く外へ！！」

主人公達が入り口のほうへ向かう。

俺もこっそりそれについていく。

ゲマが立っていた。

「ほっほっほっ。ここから逃げ出そうとはいけない子供達ですね。」

「この私がお仕置きをしてあげましょう。さあ いらっしやい！」

主人公とゲマの戦闘が始まる。

しかし、主人公達はあっさり負けてしまった。

そこにパパスが登場。

「こっ これはいつたい！ アベル！ ヘンリー王子！」

「ほっほっほっ。あなたですね。私のかわいい部下達をやってくれたのは……………」

「むっ？ お前は！？ その姿はどこかで……………」

「おや？少しは私のことをご存知のようですね。ほっほっほっ。

」

「ならばなおさら光の教団の素晴らしさを教えておかなくては……………」

「出でよ ジャミ！ ゴンズ！」

ゲマが両手を上に上げて叫ぶ。

するとパパスの目の前に2匹の魔物が現れる。

しかしパパスはあっさり倒してしまう。

「ほっほっほっほっ。見事な戦いぶりですね。」

「でも こうするとどうでしょう……。」

『なんと！ ゲマはアベルの喉元に死神の鎌をあてがった！』

「アベル！」

「この子の命が惜しくなければ存分に戦いなさい。」

「でもこの子の魂は永遠に地獄を彷徨うことになるでしょう。ほっほっほっほっ。！」

ジャ「へっへっへ。さっきはよくもやってくれたな！」

ゴ「覚悟しなっ……！」

『パパスはただジッと耐えている！』

「ほっほっほっほっ。ずいぶん楽しませてくれました。」

「うっう……。」

パパスが起き上がる。

「おや？ まだ息があるようですね。」

「アベル！アベル！気がついていないかっ！？はあはあ………」

パパス最後の力を振り絞って声を出す。

「これだけはお前に言っておかねばっ……！」

「実はお前の母さんはまだ生きているはず………」

「わしに代わって母さんを」

ゲマが両手を上に上げる。するとゲマの真上に巨大な火の玉が現れる。

そしてそれをパパスに向かって……。

「ぬわーーーーっっ！！」

そこにパパスの姿はなかった。

「ほっほっほっ。子を思う気持ちはいつ見てもいいものですね。」

「しかし心配はいりません。」

「お前の息子は我が教祖様の奴隷として一生幸せに暮らすことですよ。ほっほっほっ。」

「ジャミ！　ゴンス！　この子供達を運び出さない。」

「ゲマ様。このキラーパンサーの子は？」

「捨てておきなさい。野に帰ればやがてその魔性を取り戻すはず。」

「ほっほっほっ。さあ行きましょう。」

「ぬんっ！」

そう言ってゲマ達は消えていった。

たまには真面目に生きましょう。(後書き)

何この話!?

やる意味あったの、これ!?

つか、無駄に長げえよ!!

てか、他のメンバーはどうなった!?

次回 印がついてるところから不真面目モード入ります。

やっぱりいつも通りに生きましょう。(前書き)

シリアスブレイカーです。

というか主人公 a n d 主人公のダブルブレイカーになりました。

後半は原作すらブレイカーしそうなので一旦切らせていただきます。

やっぱりいつも通りに生きましよう。

「へ　ヘンリー王子！」

突然そんな声が聞こえてきた。

とりあえずバレないように向こう側に泳いでいく。

入り口のところにいたら見つかってしまう。

てかこの時期の水冷たいよ！

今まで触れなかったけど全体的に意外に深いんだけど！？

床に足届かないんだけど！？　しかも装備重いから沈んでいくんだけど！？

ここにきて初めて天空の剣が邪魔になりました。

「く！鍵がかかっている！」

「ぬっ！ぬおおおおおーっ！」

パパスが鉄格子を壊すしてヘンリーのところに向かう。

「わー、父さんすごい」

すごく棒読みなんですが・・・。

とりあえず俺は見物だ。というかそれどころじゃない。

俺の生死をかけた戦いが今始まってるとんだから!!

「ヘンリー王子!」

「ふん! ずいぶんと助けに来るのが遅かったじゃないか。」

「何様のつもり?」

王子様です。何この主人公!?

「まあ いいや。どうせ俺はお城に戻るつもりはないからな。」

「王位は弟が継ぐ。俺はいないほうがいいんだ。」

早く話し進めて!! じゃないと溺れる!!

でも、むやみにバタバタすると見つかるかもしれないから出来ないし。。。。

とはいえ、何もしなかったら窒息死するしなあ。。。。

「王子!」

パンッ

パパスがヘンリーを叩いた音が響く。

「な 殴った俺をつ!!」

「そっだー、父さん。やつちまえー」

こんな主人公は嫌だ。

「王子！あなたは父上のお気持ちを考えたことがあるのか！？」

「父上は 父上は・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ねえ、帰っていい？」

俺も同感だがそれをお前が言ったらいけないような気がする。

「・・・・・・・・まあともかくお城に帰ってからゆっくり父親と話されるがいい。」

「さあ ヘンリー王子！ 追っ手の来ないうちにここを！」

パパス達が檻から出てくる。

まほうつかいが3体出現。あれ！？ なんか1体色違いが！？

というかどこかで見たことあるような気がするのはいのせいでしょ
うか？

「くー！さっそく現れたかつ！？」

「アベル！　ここは父さんが引き受けた！」

「お前は王子を連れて早く外へ！！」

主人公達が入り口のほうへ向かう。

俺もこっそりそれについていく。ようやくここから開放される……。

入り口ゲマが立っていた。何この急展開。

てか、寒！！　風邪引くよ！！

「ほっほっほっほ。ここから逃げ出そうとはいけない子供達ですね。」

「誰？　変態？　変な笑い方して」

なんかホイミンと雰囲気似てるなあ……。

「この私がお仕置きをしてあげましょう。さあ　いらっしやい！」

「何で怒ってるの？　何で出ちゃいけないの？」

多分違う意味で怒ってると思うんですが……。

『ゲマがあらわれた！』

『ゲマをやつつけた!』

倒しちゃったよ!? この主人公絶対チートかバグ使ってるよ。

まあ、俺も人のこと言えないけどね。最初から天空の剣とか出てきたし。

でもこれ倒しても倒れちゃうからなあ・・・。

「こつ これはいつたい! アベル! ヘンリー王子!」

パパス乱入。

「・・・父さん。・・・アンドレ(キラーパンサー)忘れてる」

確かにそうですがあなたはもう喋らないで下さい。

「ほっほっほっ。あなたですね。私のかわいい部下達をやってくれたのは・・・。」

じゃあ、あの色違いさんも・・・。

「むっ? お前は!? その姿はどこかで・・・。」

「おや? 少しは私のことをご存知のようですね。ほっほっほっほっ。」

というかスラリン達は何処行っただろ?

どうせこの後の展開は分かってるから今のうちに探しよう。

じゃないと、ボス戦で勝てる気がしない。

「ならばなおさら光の教団の素晴らしさを教えておかなくては……」

「出でよ ジャミ！ ゴンズ！」

何処だろう。とりあえず奥から探そう。

なるべく離れたいと思ってませんよ！？

てか、また溺れながら行かないといけないのか……。

やっぱりいつも通りに生きましょう。(後書き)

とりあえず一旦ここで切ります。

何この違い！？

もう力尽きました。

しばらくを休み下さい。

・・・返事がない。ただのバカのようだ。

何が起こつても動じない心を持ちましょう。
(前書き)

時は休むことを知らない。

忙しくチクタクと音を立てながら動いている。

それに合わせて人が動いていく。

まるで操られているかのように。

要するに、気がついたらこんなことに・・・。

何が起こつても動じない心を持ちましょう。

なんとか奥へ到着。

牢屋の中にどこかで見たことある顔と青い物体が見える。

・・・うん、見なかったことにしよう。

「あ、兄さん！」

わゝ、そんなところにいたんだゝ。

「あ、旅人さんだゝ。こんなところでどうしたのゝ？」

そのセリフをそっくりそのままあなたにお返しします。

「助けて下さい。帰る途中にボスっぽい奴に連れてこられました」

あなたたちは勇者を見捨てて先に帰るつもりだったんですか？

「鉄格子ぐらいさっきの人みたいに素手で壊せるでしょ？」

そんなこと普通の人間には出来ません。

【アランさん、後ろから何か大きいものが・・・】

《ゴッ》

痛っ！？ 何か凄い勢いでぶつかって来たんですけど！？

てか、まだ俺水の中だよ!? 一体何が・・・

「あの・・・、すみません……。ここで何をされているのですしょうか・・・?」

《バシャンツ》

『アランは100のダメージを受けた!』

《ブクブクツ》

「あ、すみません。僕達悪い奴らに捕まってしまったんです。助けてくださいませんか?」

（何普通に話しかけてんの!? もうちょいよく見てよ!? てか俺スルーかよ!!--）

「あ・・・、そうだったんですか……。すみません・・・、何か気が付かなくて・・・」

（すっごい語尾の・・・が気になるんだけど!? 最後がすっごい怪しく見えて仕方ないんだけど!?）

「気にしないでいいよ」

（ねえ、これおかしいって思ってるの俺だけなの!?）

「ちょっと待ってて下さいね・・・、今助けますんで・・・」

（これ死亡フラグって思うのは俺だけなのか！？）

『???は鍵を使った』

「Here you are」

（何で英語なの！？ 何かすごい怖いんだけど！？）

「Thank you!」

（英語で答えなくていいよ！！ 何でわざわざ英語にするの！？
てか何で違和感を覚えないの！？）

「Fuck you」

（無理して使わなくていいよ！！ むしろ使うな！！
それThank youと似てるけど正反対の意味だからね！？）

「いえいえ・・・、これくらいどうってことないですよ・・・」

（ほら、スラリンが変なこと言うから・・・増えたじゃん！！ めっちゃ怖いんだけど！？）

「じゃあ、僕たちそろそろ行きますね。外で仲間が待ってますんで」

（はい、死亡フラグ！ 逝くとか言わない！！）

「あ・・・、もしよかったら・・・送り返しましょうか・・・」

（何処に送るの！？ これもう死亡フラグ達成してんじゃないの！？
てか、もう……読みづらいし、めんどくさいわー！！）

「じゃあ、お願いする」

（お願いするんかい！！ お前の頭に遠慮という言葉はないのか！
？

てか何処が送られてもしらないよ！？）

「じゃあ……、い・き・ま・し・よ・う・か……」

（怖っ！！ 今の絶対こっちの「逝きましようか」だよ！！
てか、「し」と「よ」は分けちゃダメだろ！？ 何て読めばいいん
だよ！！）

「そうですね」

（てか、俺助けてよ！？ 俺普通に突っ込んでるけど一応気絶して
るんだからね！？）

「では皆さん……、目を瞑ってください……」

「えい……」

気がついたら遺跡の外にいた。

中で何が起こったのかはよく思い出せないけど、なんか骸骨に話し
かけられたような気がする。

たまにはこつこつのもいかがですか。 (前書き)

予告っぽい物。 k w s k は後書きで
↑

たまにはこういうのもいかがですか。

ってことで、天空の装備が揃ったのでとりあえず天空城に行くことに・・・。

（え、どうということ！？）

いきなり展開が変わるのはよくあることだけど進みすぎてわけ分かんねえよ！？）

そりゃ、いろいろあつたんだよ。いろいろと・・・。

（というか誰だよお前！？）

何昔からいました的な感じなんだよ！？ お前なんかしらねえよ！
！）

そついやぁお前に朗報だぞ。もうお前は使えねえから・・・。

（マジでか！？ それマジで言ってるのか！？）

最後まで言わせろよ。てか、そこで反応するってことはお前ちよつとは自覚・・・。

（嘘だ！！ はっ！ もしかしてこれは夢！？）

せめて述語の最初の一文くらいは言わせてくれよ。そう思うなら頼っねってみろ。

（本当だ！！ 痛ッ・・・くねえじゃねえか！？ 結局夢なのかよ！！？）

分からねえぞ。今世の中は違うが、頭の中はかもしれないブームなんだぞ。

もしかしたら正夢になるかも・・・。

（それお前の中ではやってるだけだからね！？

というかツツコミとボケぐらいは安定させようぜ！！）

お前に言われたくねえよ。まあ、いろいろ頑張れよ。

〈次回 天空城編〉

たまにはこういうのもいかがですか。（後書き）

ということで次回から天空城辺突入ということでも

いろいろ案はあったんですが全部お蔵入りすることになりました。

これ異常長いことやつてら劣化^{れっか}ああああ！！

つてことでタンタン短^{タン}と生きたいと重います。

だっていちいち天空装備暑めさんのしんどいし、

第一ネタギ・・・なんでも無いです。

でも、いきなり天空城にいるよりは

なんかこういうのがあったほうが良くない？？

ねえ、どうなの？？

え、全体的に変換がおかしい？

しらねえよ。一番最初に出てきた奴なんだから。

ちゃんとしてないとこづいづことになりますよ。(前書き)

皆様お久しぶりです。

いやー最近RPG作るのにはまっちゃって

全く意味分かんないけどねーww

・・・スイマセン、自重出来ません。

あと、新しい話が思い浮かんだんでちょっといろいろ考えてたけど、これ終わってからにします。

というか、今回はいつも以上にカオスな気がする。

ちゃんとしてないとこづいづいことになりますよ。

気付けば俺は、見知らぬ天井があった。

（意味分かんねえよ！ いや、言いたいことは分かるけどさー！）

俺は辺りを見渡してみた。

が、特に変わったところがなく、DQのどこの家でも見られそうな部屋だった。

（・・・普通だ）

どうやらここは天空城のようだ。

（何で分かるんだよ！？）

知らないうちに天空城にお世話になってたらしい。

（お世話ってレベルじゃないよな！？）

何か感じる。何か・・・大きな力が。

（何かうざいんだけど！？）

何か悪い予感がする。早く深くかぶった毛布から出よう。

（毛布かぶってたの！？じゃあ、なんでいろいろ分かってたの！？）

と、思ったけど体が重くて動かない！！

（えッ！？何、金縛り！？）

どうやら毛布が重すぎるようだ。

（なんでだよ！？）

仕方ないのもう一度寝よう。

（圧死するうううっ！！）

と、言うわけにもいかなないので俺は最後の力を振り絞って毛布を押しける。

（何と戦ってるんだよ！？）

光が見えた。

（表現の問題）

『HPが10になった！！』

（ぎゃあああああ！！）

急に光が差し込んだ所為で目が眩む。

『アランは幻に包まれた！！』

（よくあるわー）

今まで圧縮されていた所為か、体が思うように動かない!!

『アランは体が痺れた!!』

(・・・分からなくてもない)

ここはどこだ!?

『アランは混乱した!!』

(何故だ!?)

昨日の晩ご飯が思い出せない!?

『アランは毒を浴びた!!』

(混乱してるからなー)

とにかくこのままじゃいろいろまずい! とりあえず仲間を探しに行こう。

(Let's time!)

・・・Let's go!じゃね?

(え、マジで?)

えッ・・・? Let's time!ってどういつ意味?

（えッ・・・？分かんねえ。）

そもそも何が違うの？

（もう一緒にいいんじゃない？）

『みんな混乱した！！』

ちゃんとしてないとこづいづことになりますよ。(後書き)

書いててガチで分からなくなっただわー！

何が違うんだよこいつら。ただ単に単語の問題じゃないの？

まあ、意味が通じればいいんだよ。

落ち着いて行動しましょう。
(前書き)

珍しく全然進んでおりません。
引きこもり主人公です。
そしてツツコミ不在。

落ち着いて行動しましょう。

とりあえず過去を振り返りつつ、今の状況を確認しよう。

○場所：天空城（？）の一室

○HP：10／?? MP：20／??

○状態異常：マヌーサ・毒・麻痺・混乱・呪い

○呪文：パルプンテ

○装備：天空一色

○持ち物：輝眼羅^{キメラ}の翼・呪いの手紙・ゴールドオーブ・毒気思想・
毒消し草・毒化死葬

○仲間無し＝ぼっち

○外で何か大きな力

○てか俺、喋り方クールじゃね??

○コマンド：攻撃 呪文 アイテム 逃走 ツッコミ

・・・よし、ここからどうしようか。

普通の人ならまず毒消し草を食べるだろう。

だが、俺はそんな普通なことはいしない。

いや、俺の考えのほうが普通なのかもしれない。

みんながおかしいだけかも知れない。

いや、違うな。昔の人は分からない。が、今の現代人はおかしいと思うだろう。

『普通、草を食べますか？』

ほづれん草なら食べるが、そこら辺に生えてる草を食べるか！？

食べないだろ！？ 少なくとも今この場がめんのむこうにいる人達は食べないよな
！？

それにな、これ一回頑張つて食べたけどすごい苦いんだよ！！

DQの人達は平気でバクバク食べてるけど俺は違うんだよ！？

水もなしにこれを食べるのは無理だ！！

・・・ということで毒消し草類を省いてアイテムをもう一度確認だ。

輝^{キメラ}眼羅の翼・・・ここで使ったら頭ぶつけて痛い。

呪いの手紙・・・これ別に捨ててもいいよな？

ゴールドオーブ・・・せっかく天空城（？）に来たのでついでに返しとこう。

駄目だ・・・ッ！！ 全然使えねえ！！

パルプンテは戦闘用の最終兵器だから今使うのはちょっとなあ、だし、

この部屋で何か使えそうなものを探そうにも毒食らってるから無駄に動けないし、

毒消し草は使えないし、

リセットは出来ないし、とにかく最悪な状態だ。

・・・まあ、次回までになんとかなるだろう。

落ち着いて行動しましょう。（後書き）

主人公がツツコミを入れなかったので、皆さんがツツコミを入れてください。

まあ、一つだけツツコミを入れるとすれば、普通の人ならまず毒消し草を食べる前にツツコミを入れるべきですよねww

毒気思想はどんなに頑張ってもこの変換しか出てこなかったため、もうこれで行きました。（毒消し・草つと打ってやっと出てきましたw）

毒化死葬の読み方は自由。私個人的には『どくかしそう』がオススメです。

この読み方をすると二つの意味になるんですよw

毒化・しそう（意味：なりそう）みたいなww

まあ、どっちの意味でも主人公の将来の状態が見えてくるようですねww

そして、輝眼羅の翼は無駄にカッコイイ、とw

ちなみに呪いの手紙というのは天空の剣と一緒に入ってた手紙のことですw

今気付いたけど、状態異常の混乱以外最初のほうから持ってた気がします。

そして混乱はいつも通り、と・・・w

あと見直した結果、最初の頃の主人公が意外にクールだった件ww
内心と非常事態時はアレだけど、普段時の喋り方やべえwwww
書いてた本人のイメージが崩壊だわwwww

これ以上続けたら後書きが非常に長くなってしまいますので

この辺で切らせていただきます。
もしここまで読んでくださってるなら心からお礼申し上げます。

以心伝心できる友達がいたらいいですね。(前書き)

作者はホイミンが大好きです(´・ω・｀)

以心伝心できる友達がいたらいいですね。

よし、毒も治ったところでそろそろこの部屋を出よう。

え、どうやって治したって？

そりゃお前漫画やアニメの世界で爆発して黒コゲになった人が

しばらくして元に戻ってることに對してどうして？

って聞いているのと同じくらい野暮な質問だぞ？

てか、そんなことはどうでもいいんだよ。

とりあえずこの部屋から出よう。

《ブリッ》

ん、何この音？ この音ってあれだよな？

基本的に何かが破れた時や裂かれた時に使われる擬態語だよな？

てことは、この周辺の何かが裂かれたのか？

まず考えられるのはやっぱり服とかそのへんじゃないだろうか？

でも俺の装備は天空一色だぞ？ 何が破れるんだよ？

それ以前に破れた感じがしない。

紙とかもここにはないしな！。

じゃあ一体何が・・・ッΣ(。㍈ 111)！？

・・・・・・・・・・。(´・ω・、)

よし、これは気のせいだ。先に進もう(○、・・・(○)ニコッ♪

て、麻痺つとる！！×2 体が動かねえよ！？Σ(´㍈*)マヂイ？！

なんだそっちの音か・・・じゃねえ！！どうすんだこれ！！(＃。

㍈)(y-

ドアさえ開ければきっと誰かがいるに違いない。(、・・、)

ドアノブさえ掴めればッ！！(なんだこの無駄にかっこいいのは！？)

とりあえず俺は動かない体を必死に動かして倒れるようにしてドアを開けた。

(文章力不足。だいたい分かるよね？)

ドンという音と共に。(え！？)

「いたっ？(＞㍈<) ！！」

さっきから何ですかこの顔文字。うざいんですけど。

「なにするのさ・・・ってただの勇者じゃないか」

ただのって勇者って結構すごいんだぞ。1ゲーム1人しかいないんだぞ。

・・・・・・ここは論外だけど。

「どうしたの？こんなところで」

。いろいろな事情（大人も含めて）で話そうにも話せないんだが・・・

てか、あえて言わないけどこれだけのセリフでこの声の正体わかってる人いんのかな？

てことで無言で訴えてみる。

「・・・・・・」

「気がついたら知らない部屋にいて、状況がよく分からないからってそんな倒れるまで一生懸命にヒゲダンスを踊らなくても・・・」

おかしい。俺は一体どういう風に見られてるんだろっ。

「君の頭の中ってりんごみたいに狂ってるんじゃない？」

どういう意味だよ！？ 林檎に何の意味をこめてるんだよ！！

『ホイミンはキアリクを唱えた！！』

へ???

「冗談だよ」

え? どゆこと???

「僕をどっかの単なるバカ達と一緒にしないでね」

ホイミイイイインン!!

初めてお前が輝いて見えるよ!! お前に出会って初めてな!!!!

単なる馬鹿達に自分が入ってそんな感じだけど!!!!

「失礼だよ」

何で分かんだよ!? 逆に怖いわ!!

こうしてホイミンが仲間になった!!

以心伝心できる友達がいたらいいですね。（後書き）

よく分かる解説！

「フ　ハハ×2！！」

このセリフだけ続けずに言っても呪文が発動できるフィールドを貼ってやった！！愚民ども！！これで・・・・・・何かいろいろ困るがいい！！」

という空想世界の魔王　差^{サタン}誕生によって何か変なフィールド出来てしまった！！

どうする！？　この空想世界の住民（単数形）よ！！

『キ　ア

リ

ク』

『君の頭の中ってりんごみたいに狂ってるんじゃない？』

ちなみになぜ林檎かと言われるとそれしか出てこなかったからww
他はもともと考えていた元ただのセリフ（あとから気づいて林檎足したww）。

もう一度いいいます。

作者はホイミンが大好きです（、・・・）

空気を読まない行動や発言には気をつけましょう。(前書き)

せめて月刊にしようと思う。

空気を読まない行動や発言には気をつけましょう。

とりあえずホイミン回収。

早く他のメンバーも集めないとあいつらのことだから何か色々と手遅れになってしまいそうな気がする。

「あ、スラリンならさつき外にいたよ」

「多分ギリギリのところで“わゝ、たかゝい。ここから落ちたら死んじゃうかな”？」

「よし、試してみようかな？」とか言ってるんじゃない？」

「スラボウはどこかで暴れまくって捕まってるね」

「うわゝゝ、それすごい想像できるわゝゝ。」

ガチで早くしないとやばいかもしれない。

でもとりあえず地形を把握しよう。絶対迷うから。

「ちなみに外へはあそのドアから行けるよ。」

「スラボウのいる部屋は分からないなあ、ここ牢獄とか無いし・・・。」

まあ、絶対五月蠅いからすぐ分かると思うよ」

「あと、そのこの部屋には世界樹のしずくがあったから貰っておいた

ら?」

「ちなみにこの部屋は実際のゲームでは存在しない部屋だよ」

「……………えッ(。°Д°)。」

「……………何この子、この子ってこんなに優秀だったの??」

最後のは余計だけど…………。

「だから僕をどっかのバカと一緒にしないでっで行ったでしょ??」

てか、さっきから気になってたけど何で分かるの!?

これってあれか!? 主人公置いて話が進んでいく感じのやつか!?

「とりあえず近くの部屋から見ていこうよ。……………めんどくさいけど」

え、そこは無視なの!? ……まあいいか。

俺が近くのドアノブに手をかけた瞬間…………。

「やめんか!?!」

そのとき近くの部屋からごっついおっさんの大声が響いた。

え、何ですか!?! この部屋に入るのをやめろってことですか??

すいません、ここはあなたの聖地でしたか・・・。

ここは素直に立ち去ろう。

「何でそんな方向に行くの？頭の中腐ってんじゃないの？？」

・・・これじゃ露骨に変な考えが出来ないか。

こんなの理不尽だよ！！

てか普段からそんな方向にいつてるわけじゃないからね！？

ちよつとボケただけだからね！？

「それとも現実逃避？」

・・・痛い。心が痛いよ、お母さん。

・・・だってこんな雰囲気で回収したら俺が睨まれるじゃん。

「じゃあ、先にスラリン回収する？」

よし来た！！

「あ、でも僕外には行かないから」

・・・えッ（。。。。）。

「デジャブ」

それは非常に困るんだが・・・。

・・・そしてデジャブは気のせいだ。

「何だよ？僕がいないと何処にも行けないの？」

「・・・できれば言いたくなかったけど俺高いところ苦手なんです。」

「・・・いわゆる高所恐怖症っていうやつですね、はい。」

「でも、僕も無理だよ。」

僕は高いところがトラウマなの。小さい頃はよく高いところで遊んでただけど・・・。」

「・・・どうしようか。」

空気を読まない行動や発言には気をつけましょう。
(後書き)

進んでるようで進んでいない、それが私の小説です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7445m/>

これでいいんですか？？

2011年11月15日13時09分発行